令和３年度第１回伊賀地域高等学校活性化推進協議会

配　付　資　料

○ 令和３年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会委員名簿・・・・・・・・・・　Ｐ１

○ 伊賀地域高等学校活性化推進協議会設置要綱・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ２

○【資料１】令和２年度第４回協議会の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ３

○【資料２】これからの県立高校のあり方について・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ６
第１回教育改革推進会議（5/20）資料（一部抜粋）と概要等

○【資料３】今後の県立高校活性化の基本となる考え方について・・・・・・　Ｐ19

○【資料４】小規模校における活性化の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ24

○【資料５】全国の全日制第１学年学級数別の学級規模の状況・・・・・・・・Ｐ35
第２回教育改革推進会議（７/20）資料（一部抜粋）と概要等

○【資料６】あけぼの学園高等学校活性化取組の総括的な検証について・・・・　Ｐ42

○【資料７①】伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況(３カ年比較)　・・・・・・・Ｐ54

○【資料７②】伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況(令和３年３月卒)・・・・・Ｐ55

○【資料７③】伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況の推移　・・・・・・・・・　Ｐ56

○【資料８】伊賀地域の県立高等学校(全日制)の
令和３年度入学者選抜の状況　・・・・・・・・　Ｐ58

○【資料９】各高等学校の入学者の出身中学校と卒業者の進路状況　・・・・・　Ｐ59

○【資料１０】伊賀地域の県立高等学校への進学状況の推移
【北部･南部別】・・・・　Ｐ60

○【資料１１】令和３年度の協議について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ61

○【資料１２①】伊賀地域の中学校卒業者数の推移と予測(含社会増減)・・・　Ｐ63

○【資料１２②】伊賀地域の中学校卒業者数の推移と予測(含社会増減)
【北部･南部別】・・・・　Ｐ64

○【資料１３】伊賀地域の県立高等学校（全日制）の令和３年度入学定員・・・　Ｐ65

○【別添資料】令和元・２年度の協議のまとめ

令和３年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会 委員

	区　　分	所　属　等	氏　　名	
1	学識経験者 （１名）	三重大学大学院 地域イノベーション学研究科　准教授	加藤　貴也（かとう　たかや）	継続
2	有識者 （４名）	上野都市ガス株式会社　取締役保安工務部長	西垣　浩尚（にしがき　ひろなお）	継続
3		中外医薬生産株式会社　取締役管理本部長	岡森　久剛（おかもり　ひさよし）	継続
4		亀井商事	中谷　幸雄（なかたに　ゆきお）	継続
5		有限会社テレマーク	櫻井　勝一（さくらい　かついち）	継続
6	ＰＴＡ関係者 （５名）	伊賀市ＰＴＡ連合会　会長 （伊賀市立島ヶ原中学校ＰＴＡ）	甲斐　征之（かい　まさゆき）	R3新
7		名張市ＰＴＡ連合会　会長 （名張市立北中学校ＰＴＡ）	北川　昌司（きたがわ　しょうじ）	R3新
8		伊賀地区県立学校ＰＴＡ協議会　会長 （伊賀白鳳高等学校ＰＴＡ会長）	大杉　剛司（おおすぎ　つよし）	R3新
9		伊賀市内県立学校ＰＴＡ　代表 （上野高等学校ＰＴＡ会長）	小澤　隆（おざわ　たかし）	R3新
10		名張市内県立学校ＰＴＡ　代表 （名張青峰高等学校ＰＴＡ会長）	藤原　義浩（ふじわら　よしひろ）	R3新
11	市教委教育長 （２名）	伊賀市教育委員会　教育長	谷口　修一（たにぐち　しゅういち）	継続
12		名張市教育委員会　教育長	西山　嘉一（にしやま　よしかず）	継続
13	小中学校長代表 （２名）	伊賀市小中学校長会　代表 （伊賀市立阿山中学校　校長）	三木　茂（みき　しげる）	R3新
14		名張市小中学校長会　代表 （名張市立桔梗が丘中学校　校長）	西山　尚吾（にしやま　しょうご）	継続
15	教員代表 （２名）	小中学校教員　代表 （伊賀市立上野西小学校　教諭）	水守　憲司（みずもり　けんじ）	R3新
16		高等学校教員　代表 （上野高等学校　教諭）	冨田　幸司（とみた　こうじ）	R3新
17	県立学校長代表 （３名）	名張高等学校　校長	中山　隆之（なかやま　たかゆき）	継続
18		あけぼの学園高等学校　校長	松岡　曜子（まつおか　ようこ）	R3新
19		名張青峰高等学校　校長	赤塚　久生（あかつか　ひさお）	継続

計１９名

伊賀地域高等学校活性化推進協議会設置要綱

（設　置）
第１条　県立高等学校の活性化を推進し、地域社会における高等学校の特色化、魅力化を図り、生徒にとって魅力ある学習環境を整備するために、伊賀地域高等学校活性化推進協議会（以下、協議会という。）を設置する。

（所掌事項）
第２条　協議会は、次に掲げる事項について具体的に協議する。
（１）今後の伊賀地域全体における県立高等学校の在り方に関すること
（２）施設・設備に関すること
（３）県立高等学校活性化推進に資すること
（４）その他検討を要すること

（組　織）
第３条　協議会は、学識経験者、有識者、小中学校ＰＴＡ関係者、高等学校ＰＴＡ関係者、関係市教育委員会教育長、小中学校長代表、県立学校長代表、教員代表等で組織する。
２　協議会に、会長、副会長を置く。
３　会長及び副会長は、委員の中から互選により決める。
４　会長は会務を総理し、副会長は会長を補佐し会長に事故ある時は職務を代行する。
５　協議会は、必要に応じて関係者の出席を求め、意見を聞くことができる。

（調査委員会）
第４条　協議会のもとに、必要に応じて調査委員会を設置する。
２　調査委員会は、テーマに応じて会長の指名する関係者で構成する。

（会　議）
第５条　協議会は、会長が招集し、会長が議事運営する。
２　協議会の庶務は県教育委員会事務局において処理する。

（その他）
第６条　この要綱に定めるもののほか、協議会の運営に関する事項は会長が定める。

附　則
　この要綱は平成１７年７月２１日から施行する。
附　則
　この要綱は平成１９年５月１８日から施行する。
附　則
　この要綱は平成１９年１０月２日から施行する。
附　則
　この要綱は平成２３年１月１７日から施行する。
附　則
　この要綱は平成２３年８月２９日から施行する。
附　則
　この要綱は平成２４年７月１０日から施行する。
附　則
　この要綱は平成２９年９月４日から施行する。

資料１

令和2年度第4回伊賀地域高等学校活性化推進協議会の概要

１　日時　　令和３年２月２４日（水）１９時００分から２０時５０分まで
２　場所　　オンライン
３　概要
　伊賀地域の県立高等学校のあり方について、当地域の中学生の進路希望状況や現段階での入学者選抜の状況を共有し、「令和元･２年度の協議のまとめ（案）（以下、まとめ（案）という。）」を中心に意見交換を行いました。まとめ（案）の内容（以下参照）について、概ねご了承いただくとともに、今回の協議をふまえて一部修正を加え「令和元･２年度の協議のまとめ」とすることが確認されました。

まとめ（案）要旨

○　当地域においては、今後も中学校卒業者数の減少が予測され、令和８年度末（令和９年３月）までには、令和３年度末（令和４年３月）に比べ、伊賀地域北部で２学級（80 人）程度の定員減が見込まれる。
○　このような中においても、子どもたちの幅広い学習ニーズに対応し、多様な進路希望の実現のためにできる限り多くの選択肢を確保する観点から、当面の間、現在の５校を維持することが望ましい。その場合、北部の高校において定員減を行う必要があるとともに、生徒数が減少していく中で、現状のままの学習内容を維持することは難しいことから、伊賀地域全体を見通した学習内容の検討を行う必要がある。
○　令和９年度からの３年間で、中学校卒業者数がさらに 90 人程度減少することが予測されており、従前のとおり学級減で対応すると、各校の小規模化が一層進行し、活性化や魅力の維持向上が困難となる。このことから、現在の５校を再編する場合は、令和７年度頃までにその方向性を明らかにする必要がある。
○　不登校傾向の子どもたちや特別な支援を必要とする子どもたち、日本語の習得を要する外国にルーツのある子どもたちなど、多様な学習ニーズに応える新しいタイプの学校の設置に関しては、当地域の夜間定時制課程が果たしている役割を考慮しつつ、昼間定時制課程の併置を含めた定時制課程のあり方を検討する必要がある。
○　以上をふまえ、当協議会において次期計画期間中（令和４年度から８年度までの５年間）に当地域の県立高校のあり方について協議を進めるとともに、県教育委員会に具体的な検討を進めるように求める。

主な意見は次のとおりです。

≪地域の県立高校の規模と配置について≫

○　当面５校維持することは、子どもたちのニーズに応え選択肢を維持することができる。しかし、当地域だけでなく県全体でも減少することが予想されていることから、特に伊賀市内の３校について、学校が魅力を発揮して定員を充足し、活力を維持することができるか不安を感じる。各学校が活性化し本来期待される役割を果すためには、一定の規模が必要であり、今後、再編を検討するにあたっては、可能な限り学びの選択肢を維持し充実させるために、学習内容をどう引き継ぐかが大切である。生徒減に伴う定員減の対応および学校の活性化への方策、レガシーを引き継いだ再編について、今後の継続した協議が重要である。

○　自分の学びたいことや進路を積極的に選択した子どもたちは、意欲的に学習に取り組むことができることから、可能な限り多くの学科・コースや学びのスタイルを選択できる状態をつくることが求められる。

○　定員減に関わって、教員減やそれに伴う学習内容や子どもたちの進路選択、部活動に与える影響を明らかにしたうえで、今後の県立高校のあり方を考えなければならない。

○　１学級 30 人、35 人定員の実施により、少人数でのきめ細かな指導による教育効果が期待できるなどのメリットがある一方、学校の入学定員の減少に伴い教員定数が減少しても学級数が維持され教員一人あたりの持ち時間数が増加するという課題がある。

○　少人数指導や多様な選択肢の維持に伴う子どもたちの学習活動の安全確保や学校現場の負担増に対する解決策としては、地域や産業界の支援が不可欠である。

○　学級減による生徒減の対応を続けていると、各校の小規模化が進んでそれぞれの魅力が低減し、その結果地域外への流出が更に進み、再編することすら困難になってしまう。適切なタイミングで再編・統合に踏み切る決断が必要である。

○　中学校卒業者数の減少だけでなく、生徒を取り巻く価値観や環境など多くの状況が変化していることを認識しておく必要がある。

≪さまざまな子どもたちの学習環境への対応について≫

○　昼間定時制の存在意義について、これからの社会の多様性や特別な支援が必要な子どもたちのことを考えると改めてその必要性を感じる。伊賀の高等学校において昼間定時制を設けることが可能か、具体的に議論すべきである。

○　進路希望状況から見ても昼間定時制のニーズは一定ある。通信制高校の機能も備えつつ環境を整備すれば他地域からの流入も期待できるのではないか。できる限り早期の整備に向けて検討を進めてほしい。

○　不登校傾向の生徒など、学校に通いにくい生徒が自分で学びをデザインできる通信制課程のサテライト校を当地域に設けてはどうか。

○　幅広い多様なニーズに応えていくためには、昼間定時制に加えて、通信制の機能も含めた教育内容を検討していく必要がある。

○　外国籍の子どもたちや特別な支援を必要とする子どもたちが、自分のニーズに合った学びを求めて地域外に進学しなくてもよいように、地域内で学ぶことができる環境整備が求められる。

○　地域外への流出が加速し、これまでの多様な教育内容の維持が一層難しくならないよう、多様な学習ニーズをふまえた中学生が行きたい、保護者も行かせたいと思う学校づくりをともに考えていきたい。学校を活性化させれば地域外への流出をとどめることができるだけでなく、域外からの志望者の増加も期待できる。

○　地域の生徒が減少する状況において、子どもたちの教育を守り支えていく方法を、行政や産業界も一緒になって地域全体で考えなければならない。特に通学の問題は切実であり、通学バスの運行といった支援策により伊賀地域全体での多様な学びの配置を実現すべきである。

○　伊賀地域全体にそれぞれ特色を持った学校を配置することに加え、現在行われている伊賀市による伊賀鉄道利用者に対する通学費の補助のような自治体による支援を行うことで、生徒たちの選択の幅を豊かにすることができる。

≪県立高校の活性化について≫

○　学校の魅力や特色ある活動が、中学生や保護者、地域に十分に伝わっていないのではないか。志願者を増やすためには学校の取組や成果についても、わかりやすく効果的にＰＲすることが必要である。

○　県立高校の規模と配置といったハード面でのあり方については、当協議会として議論を重ね一定の方向性を共有できたと思う。今後は、制服や校則を刷新するなど各校の特色化や一層の魅力化を進め、教育内容をわかりやすく伝えるといったソフト面についても併せて議論することが大切である。

資料２－１

【第１回教育改革推進会議（5/20）資料】

これからの県立高校のあり方について

現行の「県立高校活性化計画」の計画期間が令和３年度で終了することから、令和３年度においては、教育を取り巻く社会情勢の変化等をふまえ、これからの時代を生きていくために必要となる力を育んでいくことのできる県立高等学校のあり方等について「三重県教育改革推進会議」でご審議いただき、次期「県立高等学校活性化計画」を策定していきたいと考えています。

１　教育を取り巻く社会情勢の変化

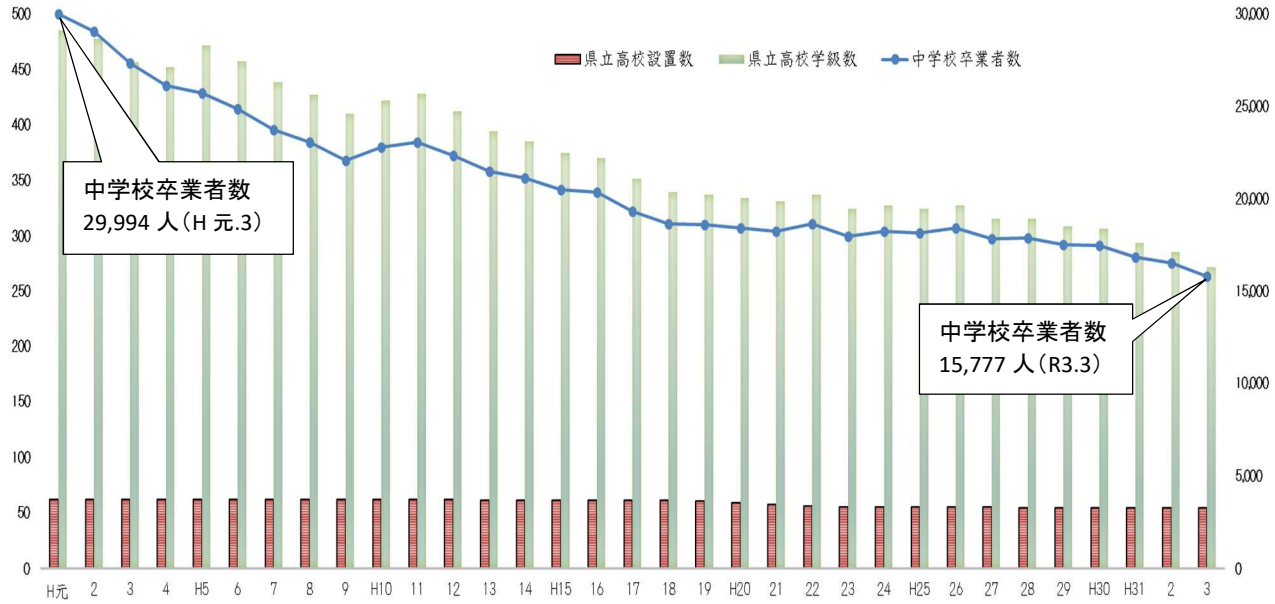
【参考】本県における少子化の状況

○　本県の人口は平成 19 年をピークに減少局面に入っており、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、令和 7 年には 171 万人に、令和 27 年には 143 万人にまで減少することが見込まれています。

○　県内の中学校卒業者数も年々減少を続けており、平成元年から令和３年を見ると、29,994 人から 15,777 人と約 47.4%の減となっています。

○　全日制課程を置く県立高校の設置数については 62 校から 54 校へ８校の減少となる一方で、全日制課程を置く県立高校の学級数は 485 学級から 271 学級と約 44.1%の減、１校あたりの平均学級数は 7.82 学級から 5.02 学級に減少しています。

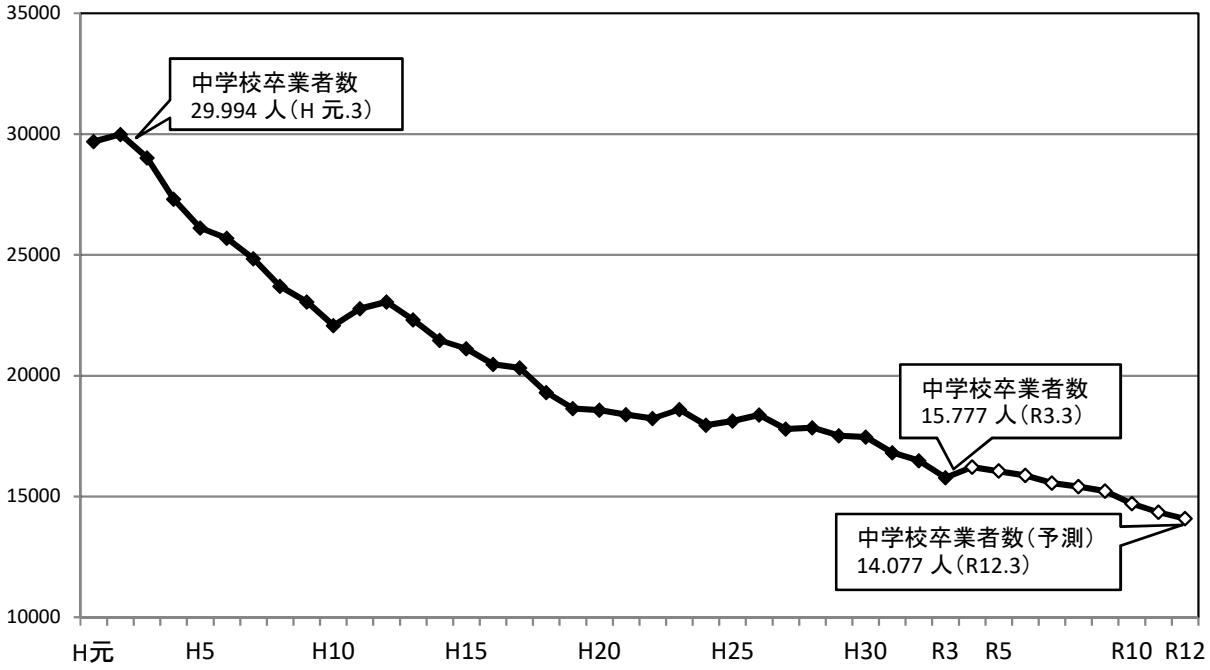
【H1～R3 中学校卒業者数/全日制県立高等学校(含校舎)設置数/全日制県立高等学校(含校舎)学級数】



	H元	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R2	R3
県立高校学級数	485	477	456	452	471	457	438	427	410	422	428	412	394	385	374	370	351	339	337	334	331	337	324	327	324	327	315	315	308	306	293	285	271
県立高校設置数	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	61	61	61	61	61	61	60	59	57	56	55	55	55	55	55	54	54	54	54	54	54

【中学校卒業者数の推移・将来推計】

中学校卒業者数は、令和４年３月に前年度を上回るものの、令和５年３月以降の５年間で 1,000 人程度減少することが見込まれています。



２　これからの時代に必要とされる力について

（１）　豊かな未来を創っていく力の育成

「三重県教育ビジョン」においては、これからの時代に必要となる力を「豊かな未来を創っていく力」とし、「確かな学力」「豊かな心」、「健やかな身体」を身に付けることで、自分のよさや可能性を認識するとともに、他者に対する理解や思いやり・優しさを育み、それらを基礎として、失敗を恐れずさまざまなことに積極的に挑戦し、他者とつながり、協働しながら困難な課題を乗り越えていく力を育んでいく、としています。

【参考】教育ビジョンに込める想い（「三重県教育ビジョン」11～12 ページ）
　　１　誰一人取り残さない教育の推進
　　２　子どもたちの豊かな未来を創っていく力の育成
　　３「オール三重」による教育の推進

（２）主体的・対話的で深い学びと個別最適な学び

令和４年度から年次進行で実施されることとなっている高等学校学習指導要領においては、育成をめざす資質・能力について、

・「生きて働く『知識・技能』の習得」
・「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」
・「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」

の三つの柱で整理するとともに、生徒一人ひとりに社会で求められる資質・能力を育み、生涯にわたって探究を深める未来の創り手を送り出していくことが重要であるとして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めていくことを示しています。

一人ひとりの子どもの能力を最大限に引き出すための ICT 等の活用も含めた多様な学びの提供、地域課題の解決に実践的に取り組む学びなど実社会とつながった学びの推進、生徒一人ひとりの状況に応じた指導と個々の生徒に応じた学習活動の提供などの個別最適な学びの推進などの実現が求められています。

３　「県立高等学校みらいのあり方検討委員会」での議論の概要

地域産業界や教育・文化等の分野、県立高等学校ＯＢなどさまざまなバックボーンや経験を持つ方々から、これまでのご自身の経験をふまえ多様な観点・角度から議論することを目的に設置した「県立高等学校みらいのあり方検討委員会」において、これからの時代を生きていく高校生にどのような学びが必要か、そのために高等学校はどのようにあるべきかなどについて、計７回にわたって議論を行いました。

【参考：協議テーマ**】**

開催日	テーマ
第１回(10 月 13 日)	・新たな時代における本県の高等学校教育のあり方について
第２回(12 月 1 日)	・県立高等学校の課題と協議テーマ ・新たな時代に対応した高等学校教育の推進①
第３回（1 月 5 日）	・新たな時代に対応した高等学校教育の推進② ・全ての高校生を誰一人取り残さない教育環境づくり
第４回（2 月 4 日）	・これからの学びに対応した学科・課程のあり方
第５回（3 月 15 日）	・これからの社会の変化と県立高等学校の学びに対応した社会性・人間性の育成 ・県立高等学校の規模と配置①
第６回（3 月 26 日）	・県立高等学校の規模と配置②
第７回（4 月 26 日）	・協議のまとめ

４　県立高等学校生徒を対象としたアンケートの実施

「県立高等学校みらいのあり方検討委員会」では、本県の高校生の現状を把握するため、令和２年度に県立高等学校に入学した生徒（アンケート時に高校１年生）を対象に、高校での学びに対する期待や興味・関心、これから受けたい授業等について、インターネットを活用したアンケートを実施しました。

【アンケートの実施概要】

○ 調査期間　令和２年 12 月７日（月）～令和３年１月 11 日（日）

○ 調査対象　学科（普通科、専門学科、総合学科）課程（全日制、定時制、通信制）別に抽出

○ 回答者数　3,373 名

（学科別内訳）普通科、普通科系専門学科　1,695 名
職業系専門学科　1,395 名
総合学科　283 名

（課程別内訳）全日制　3,146 名
定時制・通信制　227 名

【参考】アンケート項目

質問番号	項目
1	高校に入学する前、高校に対して期待していたことは何ですか。
2	現在通っている高校を選んだ理由は何ですか。
3	高校を選ぶとき、参考にしたことは何ですか。
4	どんなときに、現在通っている高校に入学出来てよかったと実感できますか。
5	現在通っている高校での生活について満足していますか。
6	質問 5 でそのように回答した理由は何ですか。
7	あなたは普段、授業の予習・復習や受験勉強、資格取得のための学習などを、授業以外（家や塾、放課後の学校等）でどれくらいしていますか。
8	あなたは普段、学校の授業時間以外に一日あたり平均でどれくらいの時間、読書をしますか。
9	あなたは普段、学校の図書館をどれくらい利用しますか。
10	地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。
11	これからの時代に向けて高校時代に身につけておくことが必要だと思うものはどれですか。
12	質問 11 で選んだ項目について、あなた自身は、それらを身につけることができていると思いますか。
13	学校だけはなく普段の生活も含めて、これから学びたいと思っていることや、興味・関心を持っていることについて一言で表現してください。
14	今後、どのような形の授業を受けたいですか。
15	現在通っている高校をよりよくするためには、どんなことをしたらよいと思いますか。
16	これからの社会には、どんな高校があったらいいと思いますか。

５　地域活性化協議会での議論の概要

中学校卒業者の大幅な減少が予想されている伊賀・伊勢志摩・紀南の各地域に設置した地域協議会において、地域の声を丁寧に聞き取るとともに、教育に関する国の動向やみらい委員会の協議内容を共有しながら、今後の地域の高等学校教育や県立高等学校のあり方等についての協議を継続しています。

資料２－２

県立高等学校みらいのあり方検討委員会
協議の概要（骨子）

令和3年5月

（三重県）県立高等学校みらいのあり方検討委員会

1. はじめに

本県においては、平成 29 年3月に「県立高等学校活性化計画」（以下、「計画」という。）が策定され、生徒一人ひとりに応じた多様な教育や地域で学び地域を活かす教育が推進されてきた。

現行計画は令和3年度末に計画期間が終了することから、次期計画の策定に向けて、学校や PTA、教育委員会などの学校関係者だけではなく、地域産業界や教育・文化等の分野、県立高校 OB など、様々なバックボーンや経験を持つ委員が、既存の高校教育の枠にとらわれない幅広で多様な観点・角度から調査し考察していくことを目的とする、県立高等学校みらいのあり方検討委員会（以下、「委員会」という。）が設置された。

この協議の概要には、中長期的に検討すべき内容の意見もあれば、早急に実施に移すことが望ましい内容の意見もある。また、対立する意見もそのまま記載し、今後の検討に委ねた部分もある。

2. 協議の流れと検討テーマの設定

本委員会では、まず、これからの時代を生きる子どもたちに必要な学びや、そのために高等学校はどうあるべきかという大きな視点から協議を行い、以降の本委員会で特に幅広く検討するテーマを設定した。

【第1回委員会における意見の概要】

○ 自ら物事を考えて課題を解決する方法を体験的に学ぶことが必要
○ 実際の経験を積むことを重視し、失敗しても何度でもチャレンジできるようにする
○ 多様な他者と関わり、様々な生き方を学ぶことが必要
○ 学ぶ楽しみや生きる喜びを感じられるようにする
○ 多文化共生の教育や外国人生徒への学習支援をする
○ 教員はこれまでの指導方法等にこだわらず、一人ひとりの生徒の状況に応じた学びを工夫して実現することが必要
○ グループワークやディスカッションで、生徒が建設的に議論できるよう導ける教員の養成が必要
○ 学校は、一人ひとりが様々な面で誰からも肯定され、自身を肯定する力が自分でも他者からも育てられる場であるべき
○ 生徒が高等学校を選択しやすいよう、各学校で目指すところを明確にする

【検討テーマ】

・ 新たな時代に対応した高等学校教育の推進
・ 全ての高校生を誰一人取り残さない教育環境づくり
・ これからの学びに対応した学科・課程のあり方
・ これからの社会の変化と県立高等学校の学びに対応した社会性・人間性の育成
・ 県立高等学校の規模と配置

3. 協議の概要

(1)新たな時代に対応した高等学校教育の推進

＜実社会とつながった学びの推進について＞

実社会とつながった学びを推進するにあたり、どのような取組や視点が必要であるかについて協議した。

【概要】

- 全ての高校で、インターンや探究活動による企業等との連携、県外地域の先進的な取組を行っている高校との連携などを進めていけるとよい
- 子どもたちにとって、社会の一員として活躍していることを実感できる場や経験が重要であるため、アルバイトを推奨することも考えられるが、一方で、部活動への影響等による学校の活力の喪失が懸念される
- 教職員は、生徒に実社会での学びと学校での学びのつながりを実感させる指導力や学校と外部とをコーディネートする調整力、自らも学び続ける意欲が必要
- これからの時代に必要な学びを実現していくためには、働き方改革を通して教職員の勤務環境や意識を変えていくことが必要
- 生徒は自ら企画を立案し、外部とアポイントメントを取るなど、自分達の学ぶ場を自分たちで作っていくことが望ましい
- 教育関係者は、高校生は「小さな大人」であり、「大きな子ども」のままにしておかないという意識を持って、生徒を主語にした学校づくりを心がけることが大切

＜個別最適な学びの推進について＞

個別最適な学びを推進していくにあたり、どのような取組や視点が必要であるかについて協議した。

【概要】

- 中学校の段階から、自分の興味・関心に基づいて能動的に学ぶ楽しさを体験することが必要
- 生徒の興味と学ぶ目的をつなげていくことで、生徒が自ら学習を進めていけるように導くことが教員には求められる
- 教員が生徒に教えるだけでなく、生徒同士で教え合うという仕組みを取り入れることで、生徒にとっては学びの定着が図られるとともに、教員の生徒理解も促進される
- 学校においては、子ども一人ひとりを主語にしながらカリキュラムを柔軟にすることで多様な学び方を可能にし、そこに軸を通していくことが求められる

（2）全ての高校生を誰一人取り残さない教育環境づくり

＜外国人生徒への支援について＞

外国人生徒が社会の一員として自立するための力を育んでいくため、県立高等学校において必要となる視点や取組の方向性、学びのあり方について協議した。

【概要】

- 日本語での概念理解が難しい教科などは母語で開講するとともに、オンラインで受講できるようにするなどして、母語での単位修得を広げていってはどうか
- 将来、日本で大学進学や就職を目指すのであれば、社会に出るまでに日本語を習得できるように徹底するべき
- 生徒が学校を休んでしまう背景について分析し、授業に出席できるよう、教職員や学校でサポートしていける体制があるとよい
- あるアメリカのコミュニティ・カレッジでは、生徒が集まって得意分野を互いに教えあえる「ラボ」という場が校内にある。こうした例を参考に、日本人と外国人が共に学び、教え、サポートし合えるような仕組みや場所を作り、誰でも好きなときに行けるようにするとよい
- 外国人生徒を対象とした入試枠がある高校は少なく、進学の選択肢が定時制高校のみとなってしまう状況があるため、こうした入試枠を各地域で増やすことが必要
- 単位修得や修業年限などについて、生徒の状況に合わせた柔軟な制度としていくことが必要
- オンライン等を使ってどこの地域・学校でも同じような支援を受けられる環境の整備や、生徒の相談に対応できる支援員を確保していくなど福祉的な視点も含めたサービスを充実していくことが必要

＜不登校生徒への支援について＞

不登校生徒が自身と社会とのつながりを途切れさせることなく、社会性や自立心を育み、安心して学んでいくために必要となる視点や取組の方向性、それらをふまえた高等学校のあり方について協議した。

【概要】

- 生徒一人ひとりが多様な価値観を認められることで、自分はここに居てもよいと感じられるようにすることが大切
- 様々な背景の子どもたちに対応できるよう、授業への出席や他校への転学のしやすさ等について、フレキシブルな仕組みを考えていくことが重要
- 不登校や退学によって将来の選択肢が狭まらない仕組みを整備することが必要
- 転入学・進級時の不適応を減らし、そう感じた時に対応できるよう、柔軟に進路変更ができる仕組みなどについて、生徒や保護者に伝えていくことが必要

(3)これからの学びに対応した学科・課程のあり方

これからの時代に必要とされる人材を育成するとともに、多様な生徒の可能性及び能力を最大限に伸長していくために、本県の学科・課程における学びの内容や方法をどうしていくべきかについて協議した。

【概要】

- 新たな学科や学校を考える際は、そこで育てたい生徒の姿などが生徒や保護者、地域に理解され、学校の特色として続いていけるよう、教職員を中心に、地域や中高生も含めて議論していくことが大切
- 普通科においては、必要に応じて様々な特色ある学科・コースを新たに考えていくべきだろう
- これからの専門学科においては、状況に応じて必要な学びを柔軟にとり入れたり、複数の学科を統合することなどにより、専門性は確保しつつ、分野横断的な学びについても考えていくべきではないか
- 専門学科の学びにおいては、基本を確実に身につけ、これからの技術の進歩に対応するとともに、応用していける考え方を学ぶことが必要
- 望ましい学びの実現には一定の学校規模が必要であることをふまえると、普通科等を統合し、学びの多様性があって子どもたちのニーズに応えていきやすい総合学科を拡充していくとよいのではないか
- 定時制と通信制を組み合わせた通信サテライト校を整備するなど、定時制と通信制が連携したフレキシブルな仕組みを作っていくべき
- ICTを活用して他校の授業を受けられる環境の整備や、授業手法や指導実績を学校間で共有する仕組み、地域の大人や大学・企業が高校教育に参画する仕組みをつくっていくことが必要だろう
- 教員を育成する体制づくりがより進むよう、必要に応じて同一校での勤務年数を長期化したり、子どもたちにより良い学びを提供するため、教員の意欲や経験、能力をふまえた配置とするなど、教員の人事についても考えていく必要があるだろう
- 他県の特色ある事例を安易に目指すのではなく、三重県の現状をしっかりと認識した上で、どのような高校教育を実現していくかについて議論すべき

(4)これからの社会の変化と県立高等学校の学びに対応した社会性・人間性の育成

選挙権年齢や成年年齢の引き下げといった制度改革、少子化による学校の小規模化、新型コロナウイルス感染症の影響等により、高等学校と生徒を取り巻く状況は大きく変化してきており、学校生活のあり方もこれまでどおりではなくなりつつある中、学校生活を通して生徒に社会性・人間性を育んでいくために、今後どのようなことが必要と考えられるかについて協議した。

また、高校生へのアンケート調査の結果をもとに、読書や学校図書室の利用促進についても協議した。

【概要】

- 教員は、授業の中で育てたい生徒の姿を実現していくために、知識を教え込むだけではない授業のあり方を考えていくことが必要
- 外部の大人に教えてもらうことなど外部人材を活用することは生徒にとって新しい刺激になると同時に、教員の多忙化を解消する手段にもなる
- 生徒の主体性を育むための仕組みを整備し、教員は生徒に「べき」論を押し付けるのではなく、生徒に任せられるようになることが必要
- 理想の学校のあり方や当たり前になっている学校のルールを見直すことについて、対話する場を設けるとよい
- 小規模化が進む中、学校の垣根を越えて授業や部活動を行える仕組みを構築したり、生徒会同士の連携を進めるなど、より広いつながりの中で、生徒の学びや学校生活を保障していけるとよい
- SNS等での情報の真偽を判断する力を、情報教育などと一緒に進めていくことが必要
- 授業や課題の中に読書をとり入れるなどして、本を読むための時間を確保するとともに、生徒に読書の楽しさや有用性などを体験できるようにすることが大切

(5)県立高等学校の規模と配置

今後の少子化の進行や県立高等学校の現状、子どもたちの進学希望の状況をふまえ、社会性の育成、ニーズに応じた幅広い教科・科目の開設、学校行事や部活動の充実等を保障していくことのできる高等学校の規模について協議した。

また、1学年4学級規模となった専門学科高校では学科の多様性や専門性を維持することが困難となったり、一部の高等学校では集団での部活動が困難となったりするなど、全県的に県立高等学校の小規模化が進む中で、これらの学校の今後のあり方を検討していく上で、どのような方向性が考えられるかについて協議した。

【概要】

- 小規模校は個別最適な学びを実現しやすいが、一方で、同年代の多様な人間関係の中で社会性を育んでいくという点などは担保しにくい
- 高校の志願状況を踏まえると、地域の子どもを同一地域の学校に進学させようとすることは、地域の子どもや保護者の教育要求に必ずしも適合していないと考えられるため、施策の方向性を変えていくべきではないか。一方で、都市部の学校にあっては、その周辺地域も自分たちの地域であるという観点で、都市部から周辺地域の活性化に貢献していくことも検討すべきではないか
- 子どもたちの進学希望を実現できるコースが地域の学校にあるとよい
- 小規模校においては、子どもたちのニーズに沿った多様な学びや高校生活を提供していけるよう、これまでの取組を検証した上で、存続か統合かを考える時期に来ているのではないか
- 小規模校を活性化していくためには、限られた財政的・人的リソースをどのように確保していくかが重要であり、都市部の大規模校の定員数を減らして、その分を小規模校に配分していくことも考えられるのではないか
- 今後、一つひとつの学校がさらに小規模化していく中で、複数の学科を併設することのよさを考えると、専門学科の統合を考えていく時期に来ているのではないか
- 高校に通えない地域が出ないようにしていくことが統合にあたっての前提であり、併せて、生徒の過度な通学負担等をサポートする方策を考えていく必要がある
- 既存の学校の枠にとらわれない、新しい形の学校についても検討する必要がある

資料２－３

令和３年度第１回教育改革推進会議概要

日時　令和３年５月 20 日(木)　18 時 00 分～20 時 00 分

【これからの県立高校のあり方について】

○　中学校においては地域の商店等での職場体験などキャリア教育の取組が進んでいるが、高校、特に進学校においては、そうした地域との学びを継続的に行うことが難しいと感じる。今後、高校においては、例えば高校所在地の中学校区の地域の方々と複数年にわたって連携し、関わり続けられるような取組があれば、地域と連携した子どもたちの学びがより深まるのではないかと考える。

○　地域内に２つの高校しかない紀南地域においては、今後も生徒数の減少が続き、推計によると令和７年度に地域内で１学級減が避けられない状況にある。高校は活性化にがんばって取り組んでいるが、子どもたちの減少が進む中でもう限界にきていると感じている。今後は、県教委にも方向性を示してもらいながら、協議会において具体的な検討を進めたいと思っている。

○　伊勢志摩地域における本年度の入試状況を振り返ると、小規模高校の存続を前提として都市部の中規模高校の定員数を減じたことに伴って都市部の私立高校への入学者が増加する結果となり、必ずしも子どもや保護者のニーズをふまえた調整となっていなかったのではないかという印象を持っている。

○　新型コロナウイルス感染症を背景に不登校児童生徒が増えているとともに、Ｎ高などの広域通信制高校に転学する生徒も増加している。こうしたことをふまえ、本県において　もインターネットを活用して高校卒業資格を取得できる通信制高校について検討していく必要があるのではないか。

○　外国人生徒の受け入れを充実させていくとしても、日本語しか話せない教員が様々な言語・国語を持つ生徒を指導していくのは現実的に難しい。まずは、外国人生徒を受け入れている学校の教員から実情を聞き取り、現状を把握したうえで、どのようなカリキュラムとすべきか、どういった教員を配置しなければいけないかを考えていく必要がある。

○　個別最適な学習を進めていくためには、子どもたちが関心を持って学んでいけるよう、一人一台タブレットの活用や周りの大人のサポートを通して、子どもたちが自分の興味や身近にある課題の解決と学びを結びつけられるようにすること、また、こうした学びが小中高を通して行えるようにしていくことが大切である。

○　高校入試についても、子どもたちの様々な個性・能力や学びを評価できるような入試制度への改善を図っていくことが必要である。

○　子どもの高校受験の際に開催された各高校の説明会では、小規模高校においては教員が一人の生徒に対して熱心に指導してもらえ、その結果として、子どもの望む進路の実現に向けて子どもと一緒になって取り組んでくれるという印象を持った。小規模校の今後を検討するにあたっては、地域の子どもの人数が減っていくなどの状況もあるが、小規模校の良いところを大事にしていけるよう考えていくことも必要ではないか。

○　三重県の県立高校の規模と配置の問題は、これまでの対応の結果として高校の規模が小さくなった現状についてこのままで良いのかということであり、これまでの方針を転換することを前提に、人間形成の場としての学校における生徒の学びや教育の質をどのようにしたら維持・向上させていけるのかという観点から、今後のあるべき形を考えていく必要がある。

○　今後の議論に際しては、学校の小規模化にともなって何が起こってきたのか、こどもたちの学習や人間形成にどのような影響が生じているのかといったことをふまえ、今後どのようなことが起こりうるのかをできる限り考えていくことが必要である。さらに、人的・財政的な効率性という面も考える必要がある。今後、必要なところに必要な資源を充てていくためには現状のデータを押さえておく必要がある。

○　今後、県立高校における特色ある学科・コースを考える際には、私立高校が建学の精神にもとづく特色ある教育を実践していることもふまえ、私立高校と県立高校の棲み分けを考慮して検討する必要があるのではないか。

○　県境にある高校の統合を考えるにあたっては、当該地区の日常の生活圏もふまえた上で、例えば和歌山県や奈良県の高校との統合などを考えても良いのではないか。

○　若手教員が小規模校に赴任した場合に相談できる同僚が少なく人材育成がなかなかうまくいかないといった状況は小中学校教員の例として聞くことがある。教員の苦しい状況は生徒にも影響が及ぶことから、同じ教科の教員が複数人いて互いに相談しあえ校務も分担できる、教員に過度な負担がかからないような学校規模を考えていく必要がある。

○　これからの県立高校活性化の進めていく上での基礎になるものとして教員の働き方改革を進めていくことが必要である。部活動の指導やICT化への対応などもある中で、現場の教員が疲弊しないようにする方策についてもこれからの学校のあり方とあわせて考えていかなければならない。

資料３

【第 2 回教育改革推進会議（7/20）資料】

今後の県立高校活性化の基本となる考え方について

１　これからの県立高等学校活性化の基本的な考え方について

第 1 回教育改革推進会議で各委員からいただいたご意見をふまえ、これからの県立高校活性化の柱となる「基本的な考え方」を以下のとおり整理しました。

今後、次期計画骨子案の策定に向け、「基本的な考え方」に沿った具体的な取組について検討を進めていきたいと考えています。

（１）新しい時代を生き抜いていく力の育成

ア）人生 100 年時代の中で、自立した学習者として学び続けることのできる力の育成

イ）さまざまな変化に主体的に向きあいながら、新たなことを学び、挑戦する意欲の育成

ウ）自らの生き方や働き方について考えを深め、学ぶことと自己の将来とのつながりを見出していくことのできる力の育成

エ）多様な選択肢の中から進路を決定する能力や人間関係を築く力の育成

オ）諸課題の解決に向けて自分の意見や考えを伝えあい、他者と協働してより良い社会を形成しようとする力の育成

（２）新たな時代に対応するために必要な力を育むための学びの推進

ア）全ての生徒における主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善

イ）生徒一人ひとりの状況に応じた指導と個々の生徒に応じた学習活動の提供などの個別最適な学び

ウ）文系・理系を問わず、教科横断的な視点で物事をとらえ、実社会での課題解決に向けて創造的思考力や論理的思考を育む学び

エ）地域の方々や職業人など多様な人々と関わりながら、地域の特色や産業を題材に地域の魅力や課題を知り、自分たちに何ができるのかを主体的に考えて行動する課題解決型の学び

オ）異なる文化に対する理解や郷土への愛着、語学力やコミュニケーション能力などを高め、将来、世界にあっても地域にあっても活躍できる力の育成に向けた学び

カ）ICT をはじめとした先端技術を手段として積極的に活用しながら実社会の課題等の解決をめざし、人間ならではの考え方で新たな価値を創造できる力の育成に向けた学び

（３）多様な生徒が学べる環境の整備

義務教育段階の学び直しが必要な生徒、日本語指導が必要な生徒、特別

な支援を必要とする生徒、不登校の状況にある生徒、経済的困難な状況にある生徒等の個別の学習ニーズに応え、将来のキャリアや職業等に希望を持ち、安心して学びを続けることのできる環境の整備

（４）少子化の中での学校や学びの特色化・魅力化の推進

ア）生徒の多様な進路志望に対応するとともに、これからの時代に求められる力を備えた人材を育成できる普通科、専門学科、総合学科、定時制、通信制における学び

イ）小規模高校の総括的な検証をふまえ、全ての県立高校に通う生徒に部活動も含めた教育活動の中で社会性・人間性を育むとともに、生徒の学習ニーズに対応した幅広い科目の開設や専門性が維持できる学校の規模やあり方

ウ）生徒の学びのニーズを基本としながら、通学環境、地域における高校の役割をふまえた学校の配置

（５）特色・魅力ある教育の実現に向けた学校経営と教職員の資質向上

ア）多様な主体との連携・協働など、学校内外の教育資源を最大限に活用した教育の推進

イ）校長のリーダーシップのもと、学校内外の人材との連携と分担を通して様々な課題に対応できる学校マネジメントの推進

ウ）各学校において育成をめざす資質・能力等に係る教育活動の指針の明確化とカリキュラム・マネジメントを通じた教育活動の改善

エ）生徒の可能性を引き出すための個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた教職員の資質の向上

オ）中学生や保護者、中学校教員をはじめ広く県民の皆さんに向けた各学校における特色・魅力ある教育の情報発信

２　県立高校の規模と配置について

（１）平成元年から令和３年の状況

県内の中学校卒業者数は、平成元年から令和３年の間に 29,994 人から 15,777 人と約 47.4％の減となっています。同様の期間における全日制課程を置く県立高校の設置数は、62 校から 54 校へ８校の減少となっているとともに、学級数は 485 学級から 271 学級と約 44.1％の減少、１校あたりの平均学級数は 7.82 学級から 5.02 学級に減少しています。

（２）現行計画における規模と配置の考え方と小規模校の取組

①　基本的な考え方

○　高等学校においては、生徒が集団の中で多様な考えに触れ切磋琢磨することで、思考力や表現力、判断力、問題解決能力などを育み、社会性や規範意識を身に付けることが重要である。

○　生徒の希望等に応じた多様な選択科目の開設が求められており、専門性などでバランスの取れた教員配置を行うためには一定の教員数が必要である。

○　高等学校の配置については、学校の規模だけでなく、地域の担い手育成など地方創生の取組が進められていること、生徒の通学など教育機会の保障への配慮等をふまえる必要がある。

○　高等学校の規模や配置、学科のあり方については、地域の状況や学校の果たす役割、学校・学科の特色等に配慮するとともに、地域活性化協議会等の場で地域の方々の声を聴きながら総合的に判断する。

○　高校の活性化については、生徒はもとより、県民の方々が学校の特色や果たす役割等に積極的な意義を感じ、「行きたい学校」、「誇りに思う学校」となることを目指し、学校、地域、行政など全ての関係者が当事者意識を持って行動していく必要がある。

② 望ましい学校規模

○　高等学校は社会性の育成、幅広い教科・科目の開設、学校行事や部活動充実のために一定の規模が必要となること、多くの県で１学年４学級から８学級を適正規模としている中で本県の地理的な特徴や地域により状況が異なることを考慮して、望ましい学校規模を１学年３～８学級としています。

③ １学年２学級以下の学校（小規模校）における活性化の取組

１学年２学級以下の高等学校（３学級規模の学校もこれに準じる）においては、学校ごとに市町関係者や地元産業界、小中学校および高等学校の保護者や教員等で構成する協議会を設置し、学校は「地域でどのような役割を担い地域に貢献するか」という視点で、地域や産業界は「子どもたちのために学校とともに取り組む」という視点で、地域の状況、学校・学科の特色等をふまえた活性化に取り組んできました。

現行計画の最終年度である令和３年度においては、活性化の取組や生徒の進路実現の状況、入学者の状況など、その活動と成果の総括的な検証を行い、その後のあり方を検討することとしています。

（詳細は資料4「小規模校における活性化の取組」等）

（３）現行計画期間における県立高校の変化

① 全国の全日制第１学年学級数別の学級規模の状況（資料 5-1）

平成 28 年から令和３年の５年間における本県の全日制高校１校あたりの平均学級数を見ると、全国平均では 5.61 から 5.23 へ減少する中、本県においては 5.83 から 5.02 へ減少しています。

（参考）　県立高等学校（全日制）における学級数の状況（資料5-2）

② 学科・コースの新設・改編

生徒数の減少や地域のニーズ等、高校教育を取り巻く社会情勢の変化に対応するため、以下の学科・コース等の新設、改編を行いました。

	高 校	改 編 前	改 編 後
平成 29 年度	稲生高校	普通科モータースポーツ類型	普通科自動車工業類型
平成 30 年度	四日市工業高校	（新設）	ものづくり創造専攻科
平成 31 年度	伊賀白鳳高校	工芸デザイン科	建築デザイン科
	明野高校	流通科学科募集停止	農業に関する学習は生産科学科と食品科学科の教育内容に引継ぎ
令和2年度	志摩高校	普通科国際コース募集停止	国際コースの学びは普通科の類型に引継ぎ
	稲生高校	普通科情報コース募集停止	情報コースの学びは普通科の類型に引継ぎ
令和3年度	四日市農芸高校	生産科学科　食品科学科 環境造園科　園芸科学科	農業科学科　食品科学科 環境造園科

③ 普通科・普通科系専門学科

○ 平成 29 年度に９学級規模であった３校は令和３年度にはいずれも８学級となり望ましい学校規模の上限を超える学校はなくなるとともに、８学級規模であった９校のうち６校が７学級、１校が６学級となりました。

○ 望ましい学校規模の下限を下回る学校は、平成 29 年度の５校から令和３年度は８校（９校舎）となりました。

④ 職業系専門学科

○ これまで、募集定員の策定においては、職業系専門学科における小学科（工業学科の機械科、電気科など）の多様な学びを維持する観点から、複数の学級規模のある小学科を減じてきました。その結果、志願者の多い機械科を含め、多くの小学科が１学級規模となりました。こうした中、地域で唯一の職業系専門学科を設置する高校や１学年３学級以下の高校のうち職業系専門学科を設置する学校においては、定員を減じる中においても専門教育を保障し、生徒が多様な選択肢の中から進学先を選ぶことができるよう、一学級 35 人もしくは 30 人の学級編成を行いました。

⑤ 総合学科

○ 多岐にわたる進路希望を有する生徒が普通科系教科や専門系教科の中から主体的に学習内容を選択することができる総合学科は、生徒における幅広い選択を可能とする教育課程の編成が必要となります。

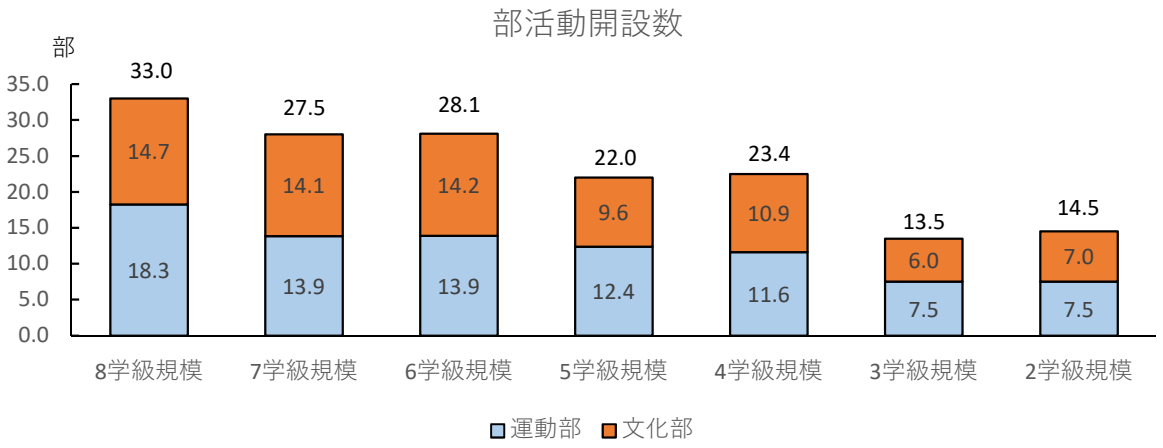
○ ７学級規模・５学級規模の総合学科における普通科系教科の科目数は平均

67 科目、専門系教科の科目数は平均 59 科目、２学級規模・１学級規模の総合学科における普通科系教科の科目数は平均 37 科目、専門系教科の科目数は平均 25 科目となっています。

⑥ 特別活動等

○ 学校の規模が小さくなることに伴い、学校行事等の特別活動や部活動において、生徒が集団の中で多様な考えに触れ切磋琢磨することで、思考力や表現力、判断力、問題解決能力などを育み、社会性や規範意識を身に付ける機会を維持することが困難となります。

○ 学級数別の部活動開設数は、６学級規模の学校では平均 28.1 部（運動部 13.9 部、文化部 14.2 部）、５学級規模の学校では平均 22.0 部（運動部 12.4 部、文化部 9.6 部）となっています。



資料４

【第２回教育改革推進会議（7/20）資料】

小規模校における活性化の取組

現「県立高等学校活性化計画」において、人口減少や生徒数の大幅な減少が見込まれる中、地方創生、地域の担い手育成の視点を大切にしながら、地域との協働による魅力ある教育と学校づくりを進めてきました。

１学年３学級以下の小規模な高等学校においては、学校ごとに活性化協議会を設置して、市町関係者、地元産業界の地域関係者と学校の魅力向上とそれに伴う入学者の増加をめざして具体的方策を協議し、地域の状況、学校・学科の特色などをふまえ、「活性化プラン」を策定して、地域と一体となった活性化の取組を推進してきました。

【学校別協議会を設置している高校：9 校 10 校舎】

白山高校（津市）、飯南高校（松阪市）、昴学園高校（大台町）
南伊勢高校南勢校舎（南伊勢町）、南伊勢高校度会校舎（度会町）
鳥羽高校（鳥羽市）、志摩高校（志摩市）、水産高校（志摩市）
あけぼの学園高校（伊賀市）、紀南高校（御浜町）

１　活性化の取組

（１）地域と連携した教育の充実

（地域課題解決型キャリア教育モデル構築事業等：Ｒ１～３年度）

地域の小規模校を実践パイロット校に指定し、高校生が地域の課題や産業を題材に、地域住民や職業人と関わりながら探究的に学ぶ地域課題解決型キャリア教育に取り組んでいます。取組を通じて生徒が地域への愛着や誇りを高め、その地域で活躍できる将来像をイメージすることや将来にわたって学び続けることのできる能力・資質の育成もめざしています。

各パイロット校には、地域と学校をつなぐコーディネーターが巡回し、各校の学習活動の支援、地域の方々や職業人とより深く関わる学習環境の整備等をサポートしています。

各パイロット校は学校の実情に応じて育てたい生徒の力を明確にし、教育課程に位置づけて実施しています。生徒は、個人またはグループで、地域産業、観光、地域学など、テーマを設定し、

・地域のプロフェッショナルからの講義
・実際の現場において業務を体験
・市場調査・先進地調査の実施／それらに基づいた商品開発
・長期休業期間を利用した業務の体験や実験販売
・県内外の先進地において同様のテーマに取り組む高校生と交流

などの学習や活動を通じて地域の課題解決に取り組んできました。

○　**特徴的なカリキュラムの設定**

・　新しく設置した「地域創生アドバンスコース」での「地域探究」「地域課題研究」などの科目において、地元企業の方々や町長をはじめとする行政関係者からの講話や対話などから地域を学び、探究活動につなげています。（南伊勢高校南勢校舎）

・　文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定をうけて、カリキュラム開発に取り組んでいます。「産業社会と人間（１年生）」で、地域産業や観光資源のフィールドワーク等を通じて地域を知り、課題を見つけ解決策を考察し、「キャリアデザイン（２年生）」で、地元企業でのインターンシップ等を通じて、過疎地域での企業経営等の工夫や努力、展望等について学び、３年生の「いいなんゼミ」では、さらに研究を深めてレポートをまとめ、「いいなんゼミ発表会」において地域の方々等に学習の成果を発信します。（飯南高校）

・　志摩市や地域の協力を得ながら、「総合的な探究の時間」を活用し、生徒全員が３年間にわたってフィールドワークやインターンシップ等で地域を知り、地域で体験し、地域課題の解決策について考える「志摩学」での探究活動に取り組んでいます。（志摩高校）

・　学校設定科目「鳥羽学」では、毎時間鳥羽市のサポートを得ながら、海女文化の学習・魅力発信や中心市街地活性化等について考える授業を展開しています。（鳥羽高校）

・　学校設定科目「地域産業とみかん」では、地域の協力を得ながら、地域の特産品みかんの栽培から流通までの過程や、関連する産業について、体験活動を通じて体系的に学ぶとともに、課題解決力やコミュニケーション力を育む探究的な学びに取り組んでいます。（紀南高校）

・　カリキュラムの設置時に比べて取組に魅力を感じる生徒が減ってきたことなどから、選択する生徒が少なくなる事例もあり、課題となっています。

○　**他校や他県の先進校との交流等**

地域の特産物を利用した他県の先進的な取組をしている学校を訪問し、意見交換など生徒同士の交流をしたり（紀南高校）、三重テラスにおいて、生徒が開発に取り組んだ新商品のＰＲ活動や販売実習を行ったりしました（あけぼの学園高校）。コロナ禍の中で、オンラインも活用し、先進的な地域活性化取組を行っている他県の高校と交流・協働してＰＲポスターを作成するなどＪＲ名松線の活性化をめざす取組もはじめています（白山高校）。

また、夏季休業中に開催されている全国高校生 SBP 交流フェア（Social Business Project：伊勢市で開催）に生徒が参加し、地域資源を生かした課題解決型のプロジェクト学習に意欲的に取り組む全国の高校生と交流しました。

※ 参加校：南伊勢高校南勢校舎、同高度会校舎、飯南高校、白山高校、
あけぼの学園高校、紀南高校、昴学園高校

○　各地域での成果発表会の開催

各校は、年度末に地域の方々を招いて成果発表会を開催し、学習の成果を発信・ＰＲをするとともに、次年度の取組の改善につなげています。コロナ禍の中、より多くの地域の方々に参加いただくことが課題となっています。

（２）課外活動

○　授業等で地域学習や地域課題の解決に興味・関心を持った生徒たちが、課外活動として地域に貢献する活動をはじめており、地域でのボランティア活動への参加や地域イベントで自分たちが作成したプロジェクションマッピングの上映など活動は広がりを見せています。(南伊勢高校南勢校舎、同高度会校舎、昴学園高校、紀南高校等)

○　地域研究サークル「とばっこくらぶ」では、鳥羽市観光課や定期船課と連携した地域活性化の取組を行ったり、観光甲子園全国大会での入賞や他府県高校との交流等の活動を続けています。(鳥羽高校)

○　「道の駅コラボプロジェクト」として連携中学校と一緒に活動したり、地域を盛り上げることを目的に活動している学校のサークル活動(應援團活動)において地域の企業とコラボレーションした「木の手帳」の開発に取り組んだり、地域の大きな課題である空き家問題の解決に取り組んだりするなど、地域のさまざまな団体と連携した活動を実施しています。(飯南高校)

（３）高校生地域創造サミットの開催

高校生が地方創生や地域活性化の重要性について理解し、地域のことを主体的に考え行動する意欲や地域とともに課題解決に取り組む姿勢を身につけられるよう、平成 29 年度から高校生地域創造サミットを開催しています。サミットでは、高校生が地域の課題を題材として、フィールドワークや他県・他地域の高校生とのディスカッションを行い、高校生ならではの発想による「地域を活かした」解決策を多様な考えに触れながら検討します。

これまでに、南伊勢町（H29)、鳥羽市（H30)、紀北町（R1）で開催し、県内の県立や私立高校および県外高校生に加え、大学生サポーター等も参加しました。今年度は、松阪市飯南飯高地域での開催を予定しています（令和 2 年度は新型コロナウィルス感染症拡大のため中止)。

（４）市町からの小規模校支援策

各学校が活性化に取り組む中、地元の市町から小規模校への様々な支援が実施されています。

町内から南勢校舎に通学する生徒への町内バスの無料化や下校バスの増便、南勢校舎から大学等への進学者への給付奨学金の設立（南伊勢町：南伊勢高校南勢校舎)、海外研修参加者への経済的支援等（志摩市：志摩高校、水産高校)、内閣府事業「高校生の地域留学推進のための高校魅力化支援事業」への参画、県外生や地域留学生のための保証人の確保等（大台町：昴学園高校)、

学校活性化に向けたコンソーシアムの結成やフィールドワークでの支援等（松阪市：飯南高校）、「鳥羽学」の授業支援等（鳥羽市：鳥羽高校）、通学の利便性向上のためのコミュニティバス整備（津市：白山高校）など、各地域において小規模校の学習活動等を支援する体制が構築されました。

（５）学校の情報発信・ＰＲ活動

全ての小規模校において、学校の活性化の取り組みを地域住民、地域の小中学生やその保護者へＰＲするために、地域の広報誌等への定期的な記事掲載、地域への学校通信やコミュニティ通信等の配布、学校ホームページの更新やＳＮＳでの情報発信、生徒や教員による小学校への出前講座や交流活動等、さまざまな広報活動に取り組みました。

地域における学校への理解は進み、評価は上がってきたものの、入学者の増加にはつながりにくい状況です。

（６）県外からの生徒募集活動

○　県外からの入学者の増加をめざして、全ての小規模校において「保護者の転住を伴わない県外からの志願者の受入制度」を設けましたが、県外からの入学につながったのは以下の学校になります。

学　校　名	入学者数		
	平成 31 年度	令和２年度	令和３年度
白山高校	6	6	2
昴学園高校	－	3	9
あけぼの学園高校	1	－	－
紀南高校	1	5	2

○　地域の小規模校で学ぶ全国で魅力を紹介するイベント「地域みらい留学フェスタ」（一般社団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム主催）に、昴学園高等学校（令和元年度～）と飯南高等学校（令和２年度～）が参画し、県外からの生徒募集活動を行いました。

※「地域みらい留学」を活用した県外からの入学生
　昴学園高校：令和２年度入学生３人、令和３年度入学生９人
　飯南高校：令和３年度入学生０人

○　全国的な動きの中、より魅力的な教育活動を進める必要があるとともに、下宿などのハード面の整備に課題があります。

２　生徒の進路実現の状況

（１）基礎学力の定着に対する取組・状況

○　基礎学力の定着に向けて、国･英等の授業での習熟度別の丁寧な学習指導、ＳＨＲ等での学習タイム、基礎力診断テスト結果に応じた課外授業での個々への丁寧な指導等により、特に基礎・基本養成レベル（Ｄ３）の生徒を中心に多くの学校で基礎学力診断テストの結果が向上しました（志摩高校、あけ

ぼの学園高校、昴学園高校、南伊勢高校度会校舎、白山高校等)。また、水産高校ではＡＩドリルを活用し、生徒の学力や速度に応じた個別最適化学習を数学と英語の授業で導入しました。

○　専門性を高めて知識や技術を身につけるとともに生徒の自己肯定感を高め、希望する進路が実現できるよう､資格取得に向けた学習活動を進めています。（水産高校、あけぼの学園高校）

（２）就職支援に対する取組・状況

○　地域学習やインターンシップ等の取組により、生徒の地域や地域産業等への理解は進みましたが、多くの学校で地元企業への就職状況等に目立った変化は見られませんでした。

○　南伊勢高校南勢校舎では、町の支援により就職活動支援員が配置され、就職者のうち町内企業への就職者の割合は増えています。水産高校では、全就職者に占める水産・海洋分野への就職者の割合は上昇傾向にあり、全寮制の昴学園高校では、地元大台町出身者以外の生徒で、卒業後に大台町内の企業に就職する事例もみられました。

（３）進学支援に対する取組・状況

○　地域の協力による看護体験実習や医療看護講座等により、毎年一定数、医療分野の上級学校への進学者がいます。また、進学グループの設置により校内で進学意識が高まり、地元の小学校教員を目指す生徒が地域推薦入試にて三重大学教育学部に進学しました。(志摩高校)

○　町の支援による進学課外授業や大学進学給付型奨学金の補助制度を活用することで大学への進学者が増加しました。その中には地元の教員を目指して地域推薦入試にて三重大学教育学部に進学した生徒もいました。(南伊勢高校南勢校舎)

○　「いいなんゼミ」で生徒が研究した地域での学び　テーマをより深く学ぶために大学等へ進学する実例が増えています。(飯南高校)

・空き家片付けプロジェクトに取り組んだ生徒が、地域の活性化を学ぶために地域創生学部の大学へ進学
・理想の介護施設を研究した生徒が、生活科学科の短大へ進学
・児童分野に関心がある生徒が「箱庭療法」を研究し、社会福祉学部の大学へ進学

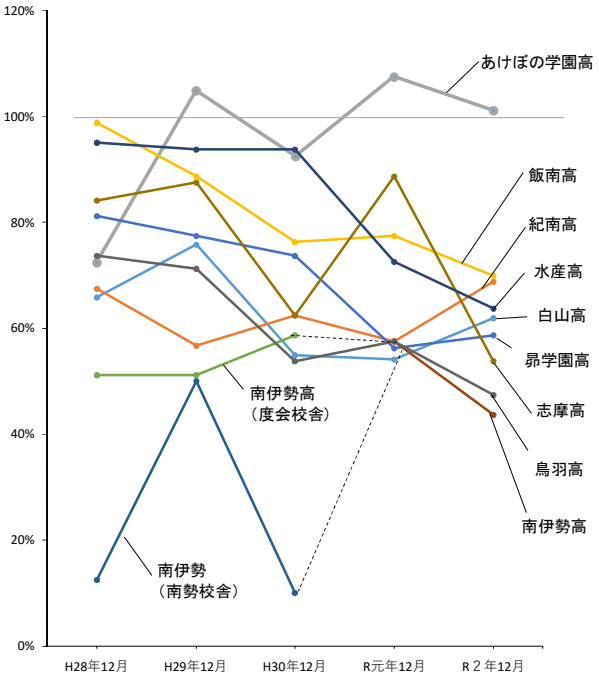
３　入学者の状況

○　県内の全ての中学３年生に対して毎年 12 月に実施している進路希望調査（12 月調査）の結果を見ると、希望者が定員を上回っているのは１校のみにとどまり、他の小規模校への進学希望者は減少傾向にあります。

○　入学者の状況（令和３年度）を見ると、定員充足率が 100%を超えているのは１校のみとなっています。

小規模校の進路希望状況（１２月調査）の推移（最近５ヶ年）

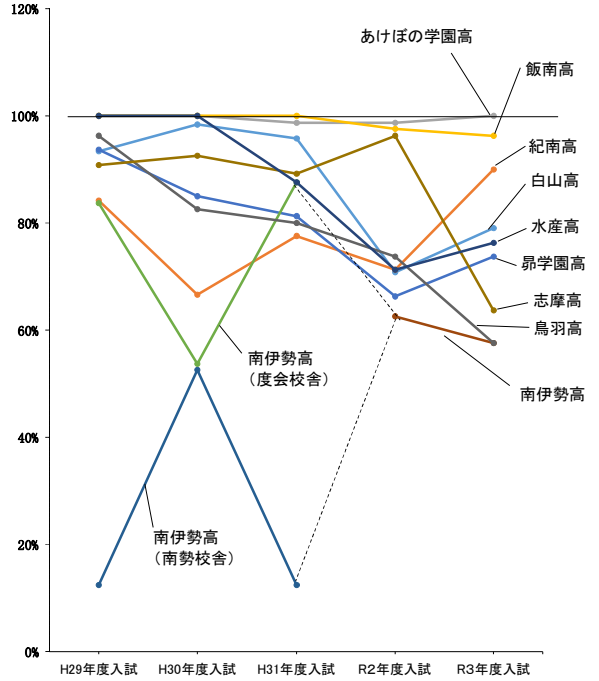
充足率（希望者数／入学定員）の推移グラフ　　県内中学生のみ



		H28年12月	H29年12月	H30年12月	R元年12月	R2年12月
白山高	充足率	65.8%	75.8%	55.0%	54.2%	61.9%
	希望者数／定員	79 ／ 120	91 ／ 120	66 ／ 120	65 ／ 120	65 ／ 105
あけぼの学園高	充足率	72.5%	105.0%	92.5%	107.5%	101.3%
	希望者数／定員	58 ／ 80	84 ／ 80	74 ／ 80	86 ／ 80	81 ／ 80
飯南高	充足率	98.8%	88.8%	76.3%	77.5%	70.0%
	希望者数／定員	79 ／ 80	71 ／ 80	61 ／ 80	62 ／ 80	56 ／ 80
昴学園高	充足率	81.3%	77.5%	73.8%	56.3%	58.8%
	希望者数／定員	65 ／ 80	62 ／ 80	59 ／ 80	45 ／ 80	47 ／ 80
南伊勢高（度会校舎）	充足率	51.3%	51.3%	58.8%		
	希望者数／定員	41 ／ 80	41 ／ 80	47 ／ 80		
南伊勢高（南勢校舎）	充足率	12.5%	50.0%	10.0%		
	希望者数／定員	5 ／ 40	20 ／ 40	4 ／ 40		
南伊勢高	充足率				57.5%	43.8%
	希望者数／定員				46 ／ 80	35 ／ 80
鳥羽高	充足率	73.8%	71.3%	53.8%	57.5%	47.5%
	希望者数／定員	59 ／ 80	57 ／ 80	43 ／ 80	46 ／ 80	38 ／ 80
志摩高	充足率	84.2%	87.5%	62.5%	88.8%	53.8%
	希望者数／定員	101 ／ 120	105 ／ 120	75 ／ 120	71 ／ 80	43 ／ 80
水産高	充足率	95.0%	93.8%	93.8%	72.5%	63.8%
	希望者数／定員	76 ／ 80	75 ／ 80	75 ／ 80	58 ／ 80	51 ／ 80
紀南高	充足率	67.5%	56.7%	62.5%	57.5%	68.8%
	希望者数／定員	81 ／ 120	68 ／ 120	50 ／ 80	46 ／ 80	55 ／ 80

小規模校の入学者状況の推移（最近５ヶ年）

充足率（入学者数／入学定員）の推移グラフ



		H29年度入試	H30年度入試	H31年度入試	R2年度入試	R3年度入試
白山高	充足率	93.3%	98.3%	95.8%	70.8%	79.0%
	入学者数／定員	112 ／ 120	118 ／ 120	115 ／ 120	85 ／ 120	83 ／ 105
あけぼの学園高	充足率	100.0%	100.0%	98.8%	98.8%	100.0%
	入学者数／定員	80 ／ 80	80 ／ 80	79 ／ 80	79 ／ 80	80 ／ 80
飯南高	充足率	100.0%	100.0%	100.0%	97.5%	96.3%
	入学者数／定員	80 ／ 80	80 ／ 80	80 ／ 80	78 ／ 80	77 ／ 80
昴学園高	充足率	93.8%	85.0%	81.3%	66.3%	73.8%
	入学者数／定員	75 ／ 80	68 ／ 80	65 ／ 80	53 ／ 80	59 ／ 80
南伊勢高（度会校舎）	充足率	83.8%	53.8%	87.5%		
	入学者数／定員	67 ／ 80	43 ／ 80	70 ／ 80		
南伊勢高（南勢校舎）	充足率	12.5%	52.5%	12.5%		
	入学者数／定員	5 ／ 40	21 ／ 40	5 ／ 40		
南伊勢高	充足率				62.5%	57.5%
	入学者数／定員				50 ／ 80	45 ／ 80
鳥羽高	充足率	96.3%	82.5%	80.0%	73.8%	57.5%
	入学者数／定員	77 ／ 80	66 ／ 80	64 ／ 80	59 ／ 80	46 ／ 80
志摩高	充足率	90.8%	92.5%	89.2%	96.3%	63.8%
	入学者数／定員	109 ／ 120	111 ／ 120	107 ／ 120	77 ／ 80	51 ／ 80
水産高	充足率	100.0%	100.0%	87.5%	71.3%	76.3%
	入学者数／定員	80 ／ 80	80 ／ 80	70 ／ 80	57 ／ 80	61 ／ 80
紀南高	充足率	84.2%	66.7%	77.5%	71.3%	90.0%
	入学者数／定員	101 ／ 120	80 ／ 120	62 ／ 80	57 ／ 80	72 ／ 80

４　小規模校活性化の総括的な検証

現計画の最終年度である令和３年度に小規模校の活性化に係る総括的な検証を行い、その後のあり方を検討することとしています。

総括的な検証は、活性化の取組状況、生徒の進路実現状況、入学者の状況の３つの項目について、現在、学校別活性化協議会において進めています。

○　各項目についての検証をより効果的に行うとともに、より多くの地域の学校関係者の方々に参画いただけるようにするため、学校別活性化協議会を２回に分けて開催し、検証を進めています。現時点の各協議会における検証内容の概観は次のとおりです。

（活性化の取組について）

・　各地域の支援を得ながら、地域や産業の担い手育成や若者の地域への定着につながるよう、地域を学びの場とした課題解決型学習に取り組むなど、地域と高校の連携・協働体制を構築することができ、生徒の学習環境の向上に繋がっている。

・　広報誌への記事掲載、ＨＰやＳＮＳでの情報発信、小学校への出前講座や交流活動等、さまざまな広報活動に加え、生徒による地域でのボランティア活動や地域イベント等での地域活性化に貢献する課外活動により、地域における小規模校への理解は少しずつ進んでいる。

・　様々な取組の中には、生徒のニーズと必ずしもマッチしないものもあり、継続的な取組とするための改善が必要な取組もある。

（生徒の進路実現について）

・　多くの学校では継続的な学び直しの取組による基礎学力の定着等により生徒の進路実現につなげているものの、地元企業への就職状況等に目立った変化はなかった。

・　小規模校では、希望者が少ないために大学進学のための専門性が高い授業が開設しにくく、また、教員数が少ないために専門性が高い教員を配置しにくい状況にある。そのような状況下でも生徒の個別の希望に対応する補習等によって、自らの将来に対する目的意識を持ちながら大学へ進学する生徒の進路が実現された。

（入学者の状況について）

・　地域の中学校卒業者の大幅な減少の影響もあり、入学者の状況については、活性化に取り組む前よりも厳しい状況となっている。令和３年度に定員を満たしている小規模校は１校のみであり、活性化期間前の平成29 年度と令和３年度を比較すると、平成 29 年度の小規模校の総募集定員 880 人に対して総入学者 786 人で募集定員数に対する入学者数の充足率は約89.3%であったが、令和３年度では定員745人に対して入学者574人で充足率は約 77.0%に低下しており、ほとんどの地域において、活性化の取組が志願者の増加にはつながっていない状況となっている。

・　また、各地域の地元中学校からの進学率の推移をみると、広範囲から生徒が集まる昴学園高校、白山高校、水産高校、鳥羽高校では進学率は多少下降傾向である。通学地域が限られる地域の高校は、あけぼの学園高校は令和３年度唯一欠員がない小規模校で、伊賀市内からの進学率も上昇傾向であり、飯南高校も地元からの進学率は上昇傾向にある。一方、志摩高校は志摩市内からの進学率は大きく下降し、南伊勢高校南勢校舎、度会校舎は年度により大きく変動しており、上昇傾向とは言えない。また、紀南高校も地元からの進学率は下降傾向にある。

・　県外生の入学をめざして、全ての小規模校において「保護者の転住を伴わない県外からの志願者の受入制度」を設けたが、この制度を含めて県外からの入学が実現したのは、白山高校、水産高校、紀南高校、昴学園高校、あけぼの学園高校である。県外生の募集に関しては、下宿等の環境整備、市町の支援状況等の受け入れ態勢が課題である。

（その他　学校の状況について）

・　小規模校では教員数は少ないが、生徒数も少ないこともあって、きめ細かな指導や個々の生徒にあった丁寧な対応ができる。一方で、教科指導では専門性が限られて開設できない科目があったり、部活動の開設数も１校平均 13.5～14.5 部と少なく､団体種目の活動を多く設けることが難しくなったりするなど、生徒にとって高校の魅力が低下する原因の一つになっている。

　また、学級減に伴って教員配置数が減少する中、他校では複数で担当する校務分掌を一人の教員が担当したり、複数の係を兼務したりするなど、教員一人が担う業務の種類が多くなっている。また、一教科の担当教員が一人となるなど、特に若い教員にとっては研修機会の確保が十分に取れない状況となっている。

　今後さらなる少子化に伴って学校の小規模化が進むと、生徒の希望に沿った選択科目の設置や幅広い部活動ができないなど、現在の教育内容を維持することは困難となることが想定される。

【小規模校（9 校 10 校舎）全体の入学者の状況】

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	H31 年度	R2 年度	R3 年度
総募集定員数(人)	880	880	880	840	760	745
総入学者数(人)	782	786	747	717	595	574
総欠員数(人)	98	94	133	123	165	171
充足率	88.9%	89.3%	84.9%	85.4%	78.3%	77.0%

【小規模校　地元中学からの進学と県外からの入学生の状況】

入学年度	白山高校(地元中学:一志、白山、美杉、嬉野)			白山高校県外入学生
	4中学出身者		4中学卒業者数	
H29	26	6.6%	393	4
H30	27	6.7%	405	2
H31	15	4.0%	376	7
R2	19	4.7%	406	8
R3	22	5.7%	383	2

入学年度	飯南高校(地元中学:飯南、飯高)			飯南高校県外入学生
	2中学出身者		2中学卒業者数	
H29	20	28.2%	71	0
H30	15	25.9%	58	0
H31	16	29.1%	55	0
R2	19	33.9%	56	0
R3	17	31.5%	54	0

入学年度	昴学園高校(地元中学:大台、宮川)			昴学園高校県外入学生
	2中学出身者		2中学卒業者数	
H29	10	13.2%	76	0
H30	9	10.8%	83	0
H31	11	16.2%	68	0
R2	10	13.9%	72	3
R3	8	13.3%	60	9

入学年度	南伊勢高南勢(地元中学:南勢、南島)			南勢校舎県外入学生
	2中学出身者		2中学卒業者数	
H29	5	5.6%	89	0
H30	20	25.3%	79	0
H31	4	6.3%	64	0
R2	13	25.5%	51	0
R3	7	11.9%	59	0

入学年度	南伊勢高度会(地元中学:度会)			度会校舎県外入学生
	度会中学出身者		度会中学卒業者数	
H29	19	24.7%	77	0
H30	6	7.6%	79	0
H31	21	24.4%	86	0
R2	9	12.9%	70	0
R3	8	14.5%	55	0

入学年度	鳥羽高校(地元中学:鳥羽市内中学)			鳥羽高校県外入学生
	鳥羽市内中学出身者		鳥羽市内中学卒業者数	
H29	23	12.8%	180	0
H30	25	13.8%	181	0
H31	9	6.4%	140	0
R2	18	13.6%	132	1
R3	14	9.4%	149	0

入学年度	志摩高校(地元中学:志摩市内中学)			志摩高校県外入学生
	志摩市内中学出身者		志摩市内中学卒業者数	
H29	99	22.0%	449	0
H30	98	22.7%	432	0
H31	90	22.5%	400	0
R2	72	18.5%	389	0
R3	47	15.0%	313	0

入学年度	水産高校(地元中学:志摩市内中学)			水産高校県外入学生
	志摩市内中学出身者		志摩市内中学卒業者数	
H29	67	14.9%	449	3
H30	54	12.5%	432	4
H31	48	12.0%	400	4
R2	40	10.3%	389	2
R3	37	11.8%	313	8

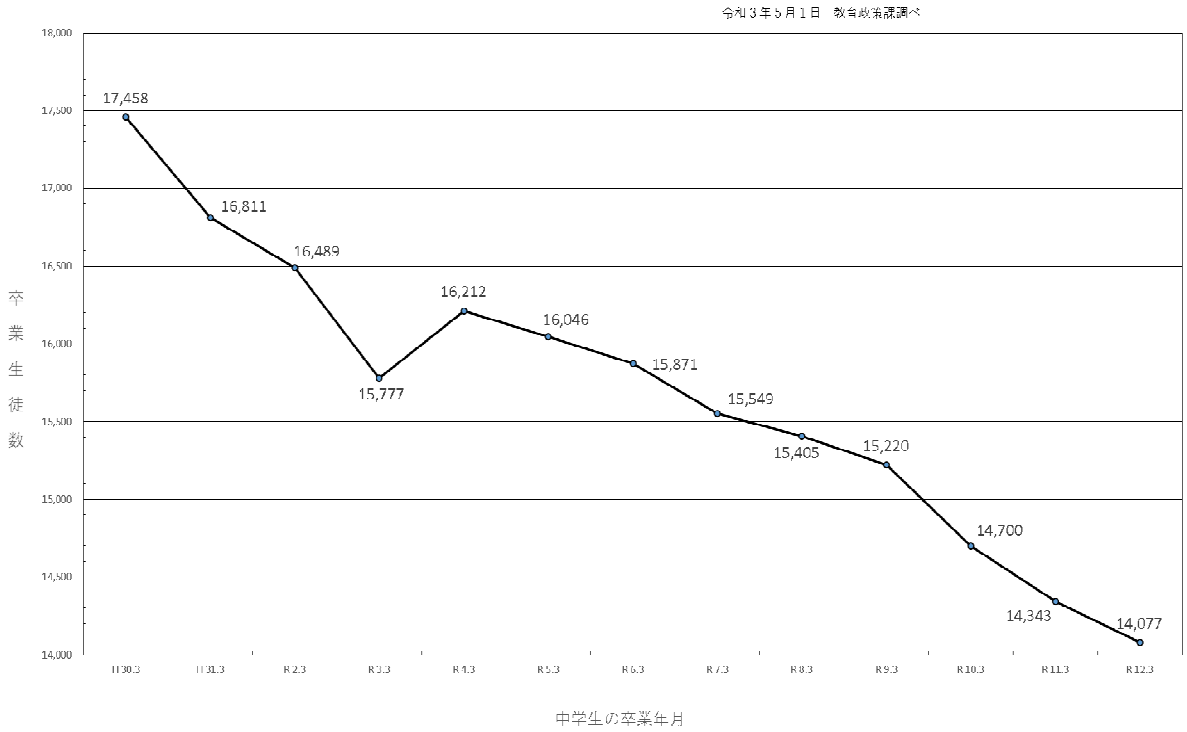
入学年度	あけぼの学園高校(地元中学:伊賀市内中学)			あけぼの学園高校県外入学生
	伊賀市内中学出身者		伊賀市内中学卒業者数	
H29	31	4.1%	761	0
H30	36	4.8%	748	0
H31	41	5.5%	743	1
R2	50	6.8%	735	1
R3	44	6.1%	724	0

入学年度	紀南高校(地元中学:南牟婁郡内中学)			紀南高校県外入学生
	南牟婁郡内中学出身者		南牟婁郡内中学卒業者数	
H29	68	32.7%	208	5
H30	56	30.1%	186	2
H31	34	19.8%	172	1
R2	35	24.5%	143	5
R3	42	26.8%	157	2

○　それぞれの学校別活性化協議会の検証結果については、今年度８月から９月にかけて開催予定の地域別活性化協議会（伊賀、伊勢志摩、紀南）において共有し、そこでの議論もふまえながら地域における今後の高校のあり方について検討を進めていきます。

○　また、地域協議会や県立高等学校みらいのあり方検討委員会でも意見が出されているように、中学校卒業予定者数が今後さらに減少していく中で、それぞれの小規模校がこれまで地道に取り組み根付かせてきた、地域を題材とした探究的な学習活動をいかにして継承・発展させていくのかという点についても、今後の高校のあり方とあわせて検討していく必要があります。

三重県中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）



【三重県　中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）】　　令和３年５月１日　教育政策課調べ

		H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中２	R 6.3 現中１	R 7.3 現小６	R 8.3 現小５	R 9.3 現小４	R 10.3 現小３	R 11.3 現小２	R 12.3 現小１
桑名	卒業者数	2,021	2,048	1,986	1,941	1,968	1,983	1,951	1,979	1,918	1,920	1,868	1,844	1,808
	前年度対比		27	-62	-45	27	15	-32	28	-61	2	-52	-24	-36
	R3.3対比					27	42	10	38	-23	-21	-73	-97	-133
四日市	卒業者数	3,844	3,637	3,578	3,418	3,636	3,442	3,433	3,418	3,503	3,373	3,335	3,248	3,110
	前年度対比		-207	-59	-160	218	-194	-9	-15	85	-130	-38	-87	-138
	R3.3対比					218	24	15	0	85	-45	-83	-170	-308
小計	卒業者数	5,865	5,685	5,564	5,359	5,604	5,425	5,384	5,397	5,421	5,293	5,203	5,092	4,918
	前年度対比		-180	-121	-205	245	-179	-41	13	24	-128	-90	-111	-174
	R3.3対比					245	66	25	38	62	-66	-156	-267	-441
鈴鹿	卒業者数	2,553	2,458	2,416	2,259	2,413	2,219	2,427	2,253	2,221	2,207	2,071	2,103	2,087
	前年度対比		-95	-42	-157	154	-194	208	-174	-32	-14	-136	32	-16
	R3.3対比					154	-40	168	-6	-38	-52	-188	-156	-172
津	卒業者数	2,684	2,614	2,686	2,586	2,516	2,666	2,615	2,496	2,503	2,443	2,399	2,360	2,314
	前年度対比		-70	72	-100	-70	150	-51	-119	7	-60	-44	-39	-46
	R3.3対比					-70	80	29	-90	-83	-143	-187	-226	-272
伊賀	卒業者数	1,549	1,503	1,449	1,429	1,440	1,398	1,385	1,356	1,315	1,332	1,285	1,237	1,192
	前年度対比		-46	-54	-20	11	-42	-13	-29	-41	17	-47	-48	-45
	R3.3対比					11	-31	-44	-73	-114	-97	-144	-192	-237
小計	卒業者数	6,786	6,575	6,551	6,274	6,369	6,283	6,427	6,105	6,039	5,982	5,755	5,700	5,593
	前年度対比		-211	-24	-277	95	-86	144	-322	-66	-57	-227	-55	-107
	R3.3対比					95	9	153	-169	-235	-292	-519	-574	-681
松阪	卒業者数	2,003	1,931	1,924	1,801	1,842	1,931	1,847	1,856	1,791	1,772	1,742	1,560	1,607
	前年度対比		-72	-7	-123	41	89	-84	9	-65	-19	-30	-182	47
	R3.3対比					41	130	46	55	-10	-29	-59	-241	-194
伊勢	卒業者数	2,192	2,079	1,966	1,827	1,879	1,927	1,737	1,768	1,723	1,737	1,598	1,563	1,612
	前年度対比		-113	-113	-139	52	48	-190	31	-45	14	-139	-35	49
	R3.3対比					52	100	-90	-59	-104	-90	-229	-264	-215
尾鷲	卒業者数	281	237	228	242	248	218	212	192	192	203	162	170	143
	前年度対比		-44	-9	14	6	-30	-6	-20	0	11	-41	8	-27
	R3.3対比					6	-24	-30	-50	-50	-39	-80	-72	-99
熊野	卒業者数	331	304	256	274	270	262	264	231	239	233	240	258	204
	前年度対比		-27	-48	18	-4	-8	2	-33	8	-6	7	18	-54
	R3.3対比					-4	-12	-10	-43	-35	-41	-34	-16	-70
小計	卒業者数	4,807	4,551	4,374	4,144	4,239	4,338	4,060	4,047	3,945	3,945	3,742	3,551	3,566
	前年度対比		-256	-177	-230	95	99	-278	-13	-102	0	-203	-191	15
	R3.3対比					95	194	-84	-97	-199	-199	-402	-593	-578
県内合計	卒業者数	17,458	16,811	16,489	15,777	16,212	16,046	15,871	15,549	15,405	15,220	14,700	14,343	14,077
	前年度対比		-647	-322	-712	435	-166	-175	-322	-144	-185	-520	-357	-266
	R3.3対比					435	269	94	-228	-372	-557	-1,077	-1,434	-1,700

全国の全日制第1学年学級数別の学級規模の状況　【第２回教育改革推進会議(7/20)資料】

資料5-1

都道府県	学校規模（学級数）　※上段が令和3年度、下段が平成28年度														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11～	全学校数	全クラス数	1校平均	
北海道	44	31	21	27	19	18	18	11				189	694	3.67	▲ 0.23
	43	34	14	36	14	21	14	22	1			199	776	3.90	
青森	2	5	6	5	8	17						43	192	4.47	0.10
	2	11	2	12	7	12	6					52	227	4.37	
岩手	9	14	6	11	11	7	4					62	224	3.61	▲ 0.44
	4	13	10	6	14	11	5					63	255	4.05	
宮城		4	11	10	8	15	11	4	1			64	329	5.14	▲ 0.14
		5	11	6	10	12	16	4		1		65	343	5.28	
秋田		6	7	7	9	12	1					42	185	4.40	▲ 0.07
		6	8	7	8	15	1					45	201	4.47	
山形	3	4	10	5	12	6		1				41	165	4.02	▲ 0.37
	1	3	10	6	14	2	4		1			41	180	4.39	
福島	6	16	5	15	13	15	7					77	317	4.12	▲ 0.47
		22	6	9	12	13	13	5				80	367	4.59	
茨城		3	15	14	13	26	10	8				89	462	5.19	▲ 0.22
		1	10	19	17	22	14	10				93	503	5.41	
栃木		1	3	25	14	8	5	3				59	288	4.88	▲ 0.41
				16	22	12	6	3				59	312	5.29	
群馬		9	6	13	13	8	8	1				58	265	4.57	▲ 0.30
		9	7	12	10	10	7	7				62	302	4.87	
埼玉		3	4	17	25	18	19	24	23		1	134	870	6.49	▲ 0.50
		1	3	7	14	36	19	23	26	4	1	134	936	6.99	
千葉		1	11	23	12	20	14	34	3		1	119	722	6.07	▲ 0.51
		1	8	18	11	21	11	29	21		1	121	796	6.58	
東京	3	2	4	18	48	38	33	29	2			177	1,040	5.88	▲ 0.43
	3	2	1	11	27	57	28	44	5			178	1,124	6.31	
神奈川				7	14	26	33	29	19	6		134	948	7.07	▲ 0.21
				5	6	28	46	27	19	10		141	1,027	7.28	
新潟	6	15	12	17	12	5	5	4	3			79	324	4.10	▲ 0.76
	1	12	8	20	11	7	10	7	3	1		80	389	4.86	
富山			4	11	7	5	5	1				33	164	4.97	0.08
			7	11	6	6	6	1				37	181	4.89	
石川		7	8	9	2	4	2	3	1	2		38	175	4.61	▲ 0.55
		7	3	6	9	2	3	3	3	2		38	196	5.16	
福井			1	7	4	2	2	7	1			24	142	5.92	▲ 0.00
				7	8	2	2	3	4			26	154	5.92	
山梨			1	4	6	8	4	2				25	141	5.64	▲ 0.14
			3	2	5	8	6	3				27	156	5.78	
長野		12	11	11	18	11	9	3				75	344	4.59	▲ 0.48
		4	14	12	11	18	12	5				76	385	5.07	
岐阜		2	7	12	12	13	5	4	6			61	332	5.44	▲ 0.43
		1	7	11	8	11	9	7	4	3		61	358	5.87	
静岡		6	6	9	29	9	15	6	3			83	445	5.36	▲ 0.63
	1	2	4	9	15	24	12	11	5	2		85	509	5.99	
愛知		7	5	9	16	36	20	31	18	3		145	941	6.49	▲ 0.52
		3	4	7	12	32	22	29	30	7		146	1,024	7.01	
三重	2	7	2	8	13	7	10	5				54	271	5.02	▲ 0.81
	1	6	3	3	6	14	5	12	4			54	315	5.83	
滋賀		1	10	5	9	8	4	3	4			44	233	5.30	▲ 0.61
		1	7	5	3	13	5	5	2	2	1	44	260	5.91	
京都			6	4	8	8	11	3	4			44	259	5.89	▲ 0.33
			7	1	9	7	9	6	7			46	286	6.22	
大阪					20	61	24	18	6			129	832	6.45	▲ 1.09
		1			6	30	29	34	19	16		135	1,018	7.54	
兵庫	5	11	10	12	29	25	22	11	1			126	651	5.17	▲ 0.71
	4	6	11	5	19	27	26	22	7	0		127	747	5.88	
奈良		2	1		7	4	3	4	7			28	182	6.50	0.00
		1	4	1	2	9	2	7	4	2		32	208	6.50	
和歌山			4	6	7	4	6		1	1		29	156	5.38	▲ 0.69
			2	5	5	7	3	5		1	1	29	176	6.07	
鳥取		1	5	6	5	1	4					22	100	4.55	▲ 0.22
		1	5	4	7		3	2				22	105	4.77	
島根	1	8	7	10	3	2	2	1				34	127	3.74	▲ 0.11
	1	8	7	9	2	3	3	1				34	131	3.85	
岡山			10	10	6	7	6	11	1			51	281	5.51	▲ 0.47
			1	16	8	3	8	11	4			51	305	5.98	
広島	13	13	4	12	11	11	10	4				78	322	4.13	▲ 0.40
	10	11	5	9	14	11	10	8				78	353	4.53	
山口		2	12	17	4	7	3	1				46	199	4.33	0.09
		5	10	20	4	4	4	2				49	208	4.24	
徳島		2	1	5	8	3	7				1	27	145	5.37	▲ 0.06
		5	1	3	6	6	3	5			1	30	163	5.43	
香川			2	7	6	4	7	3				29	161	5.55	▲ 0.03
			3	8	4	5	6	5				31	173	5.58	
愛媛	1	5	10	9	4	4	6	3	5			47	232	4.94	0.19
	1	10	10	8	4	3	7	4	5			52	247	4.75	
高知		12	2	5	3	3	4	1				30	119	3.97	▲ 0.13
		10	2	8	3	3	4	1				31	127	4.10	
福岡			5	27	18	11	9	6	8	6	1	91	533	5.86	▲ 0.43
			1	20	23	13	8	11	7	8	2	93	585	6.29	
佐賀		4	8	7	4	8	1					32	135	4.22	▲ 0.25
		2	10	7	6	8	3					36	161	4.47	
長崎	6	9	11	8	3	9	5	3				54	217	4.02	▲ 0.26
	4	9	9	10	4	7	8	3				54	231	4.28	
熊本		2	5	7	8	7	8	1	5	4		47	278	5.91	▲ 0.07
		2	5	5	10	7	9	1	5	4		48	287	5.98	
大分	2	2	1	12	11	7	1	2				38	177	4.66	▲ 0.51
		2	1	11	8	6	5	3				36	186	5.17	
宮崎	1		6	5	7	7	5	1	3			35	186	5.31	0.07
	1		7	7	6	8	4	1		3		37	194	5.24	
鹿児島		17	16	7	2	5	3	10	1			61	260	4.26	▲ 0.20
		12	16	11	3	5	2	11	1			61	272	4.46	
沖縄		2	5	5	9	10	7	11	7	2		58	364	6.28	▲ 0.08
	1	3	4	4	9	9	9	9	5	5	1	59	375	6.36	
計	104	248	307	480	530	550	398	307	133	24	4	3,085	16,129	**5.23**	▲ 0.38
	78	231	271	435	442	590	447	412	192	71	8	3,177	17,812	**5.61**	

※ 本県の令和3年度の数値について、校舎制を採用している南伊勢高校は、南勢校舎と度会校舎をそれぞれ1学級規模として計上。
※ 本県の平成28年度の数値について、校舎制を採用している南伊勢高校は、南勢校舎を1学級規模、度会校舎を2学級規模として計上。
※「全国公立高等学校第1学年定員等状況（学級数別学校数：本校））」（富山県教育委員会まとめ）を基礎に加工

資料 5-2

【第２回教育改革推進会議（7/20）資料】

県立高等学校（全日制）における学級数の状況

【平成 29 年度入学生】

地域名	２学級	３学級	４学級	５学級	６学級	７学級	８学級	９学級	学校数
桑員			桑名工業(工)		桑名北(普)		桑名西（普） いなべ総合学園(総)	桑名(普･理･看)	5
四日市			菰野(普)		朝明(普・福) 四日市四郷(普) 四日市農芸(農･家) 四日市中央工業(工)	四日市西(普) 四日市商業(商)	川越（普・英） 四日市南(普) 四日市工業(工)	四日市(普)	11
鈴鹿・亀山			石薬師(普) 飯野(他･英)		白子(普･家) 稲生(普･体) 亀山(普･情･家)		神戸(普･理)		6
津		白山(普･商)			津工業(工) 久居(普) 久居農林(農･家)	津商業(商)	津西(普･国) 津東(普)	津(普)	8
松阪	飯南(総) 昴学園(総)			松阪商業(商･国)	松阪工業（工） 相可(普･農･家)		松阪(普･理)		6
伊勢志摩	鳥羽(総) 水産(水)	南伊勢(普) 志摩(普)		伊勢工業(工) 宇治山田商業(商) 明野(農･家･福)	宇治山田(普)		伊勢(普)		9
伊賀	あけぼの学園(総)			名張(総)		上野（普・理） 伊賀白鳳 (工･商･農･福)	名張青峰（普）		5
東紀州		紀南(普)		木本(普･総)	尾鷲(普･商･工)				3
学校数	5	4	4	6	15	5	11	3	53

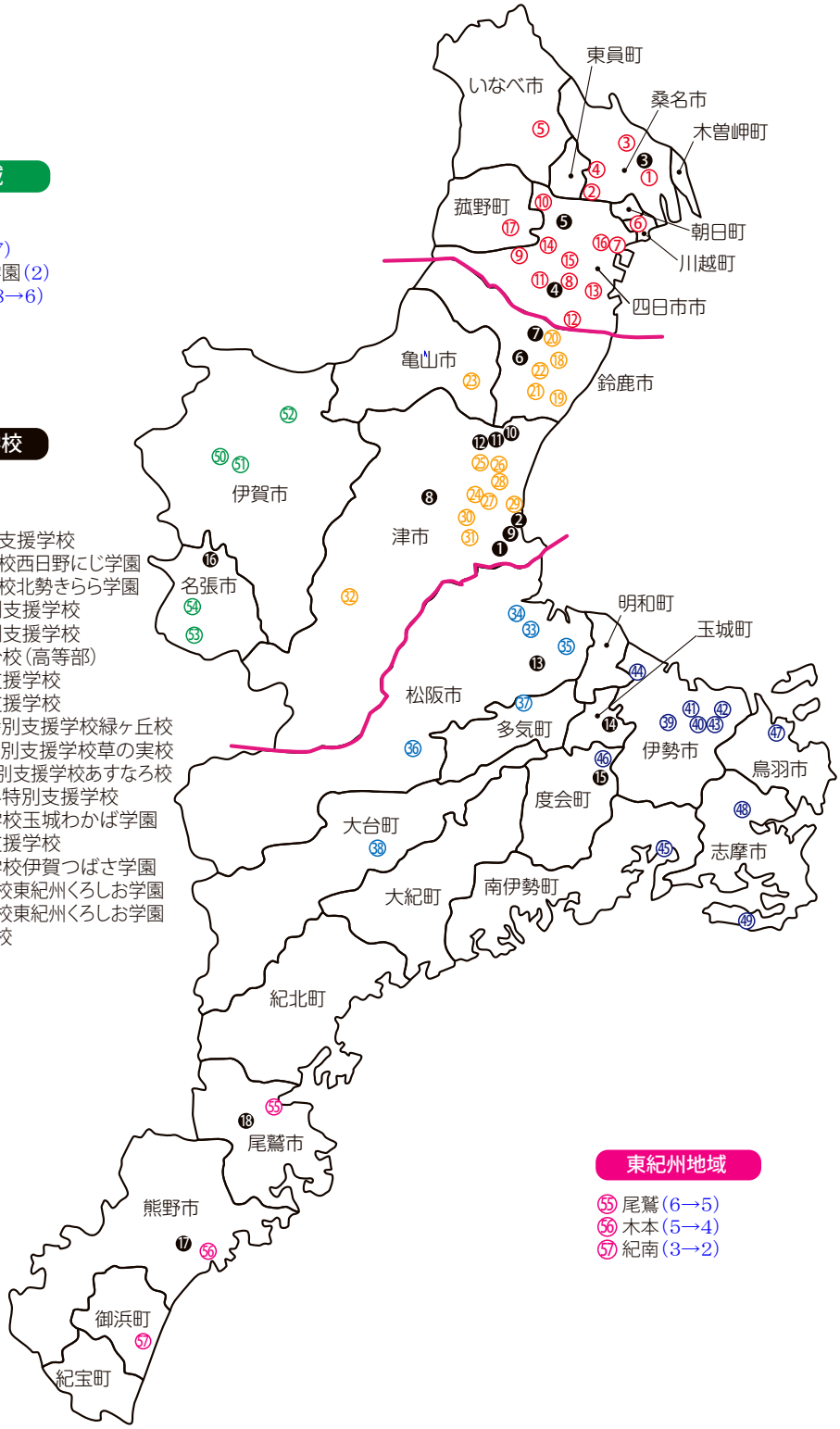
【令和３年度入学生】

地域名	２学級	３学級	４学級	５学級	６学級	７学級	８学級	９学級	学校数
桑員			桑名工業(工)	桑名北(普)		桑名西（普） いなべ総合学園(総)	桑名(普･理･看)		5
四日市			菰野(普)	四日市中央工業(工) 朝明(普･福) 四日市四郷(普) 四日市農芸(農･家)	四日市西(普) 四日市商業(商)	川越（普･英） 四日市工業(工)	四日市(普) 四日市南(普)		11
鈴鹿・亀山		石薬師(普)	飯野(他･英)	稲生(普･体) 亀山(普･情･家)	白子(普･家)	神戸(普･理)			6
津		白山(普･商)		久居(普)	津工業(工) 津商業(商) 久居農林(農･家)	津東(普)	津(普) 津西(普･国)		8
松阪	飯南(総) 昴学園(総)		松阪商業(商･国)	松阪工業（工） 相可(普･農･家)		松阪(普･理)			6
伊勢志摩	南伊勢(普) 鳥羽(総) 志摩(普) 水産(水)		伊勢工業(工) 宇治山田商業(商) 明野(農･家･福)	宇治山田(普)		伊勢(普)			9
伊賀	あけぼの学園(総)			名張(総)	名張青峰（普）	上野（普･理） 伊賀白鳳 (工･商･農･福)			5
東紀州	紀南(普)		木本(普･総)	尾鷲(普･商･工)					3
学校数	8	2	8	13	7	10	5	0	53

資料5-3

三重県立学校の所在地

【第2回教育改革推進会議（7/20）資料】



北勢地域

①桑名(9→8)
②桑名西(8→7)
③桑名北(6→5)
④桑名工業(4)
⑤いなべ総合学園(8→7)
⑥川越(8→7)
⑦四日市(9→8)
⑧四日市南(8)
⑨四日市西(7→6)
⑩朝明(6→5)
⑪四日市四郷(6→5)
⑫四日市農芸(6→5)
⑬四日市工業(8→7)
⑭四日市中央工業(6→5)
⑮四日市商業(7→6)
⑯北星
⑰菰野(4)

中勢地域

⑱神戸(8→7)
⑲白子(6)
⑳石薬師(4→3)
㉑稲生(6→5)
㉒飯野(4)
㉓亀山(6→5)
㉔津(9→8)
㉕津西(8)
㉖津東(8→7)
㉗津工業(6)
㉘津商業(7→6)
㉙みえ夢学園
㉚久居(6→5)
㉛久居農林(6)
㉜白山(3)

松阪地域

㉝松阪(8→7)
㉞松阪工業(6→5)
㉟松阪商業(5→4)
㊱飯南(2)
㊲相可(6→5)
㊳昴学園(2)

南勢志摩地域

㊴宇治山田(6→5)
㊵伊勢(8→7)
㊶伊勢工業(5→4)
㊷宇治山田商業(5→4)
㊸伊勢まなび
㊹明野(5→4)
㊺南伊勢(南勢校舎)
㊻南伊勢(度会校舎)
(1→2, 2→2)
㊼鳥羽(2)
㊽志摩(3→2)
㊾水産(2)

東紀州地域

㊺尾鷲(6→5)
㊻木本(5→4)
㊼紀南(3→2)

伊賀地域

㊿上野(7)
(51)伊賀白鳳(7)
(52)あけぼの学園(2)
(53)名張青峰(8→6)
(54)名張(5)

特別支援学校

❶盲学校
❷聾学校
❸くわな特別支援学校
❹特別支援学校西日野にじ学園
❺特別支援学校北勢きらら学園
❻杉の子特別支援学校
❼杉の子特別支援学校
　石薬師分校(高等部)
❽稲葉特別支援学校
❾城山特別支援学校
❿かがやき特別支援学校緑ヶ丘校
⓫かがやき特別支援学校草の実校
⓬かがやき特別支援学校あすなろ校
⓭松阪あゆみ特別支援学校
⓮特別支援学校玉城わかば学園
⓯度会特別支援学校
⓰特別支援学校伊賀つばさ学園
⓱特別支援学校東紀州くろしお学園
⓲特別支援学校東紀州くろしお学園
　おわせ分校

※ 全日制高校の校名の右に記載した括弧書きの数字は、1学年当たり学級数（平成29年度→令和3年度）を表す。

資料5ー4

県立高等学校の教育課程による分類　【令和 3年 4月入学生】

全日制課程

※【単】は単位制

普通科		桑名、桑名西、桑名北、川越、四日市、四日市南、四日市西、朝明、四日市四郷、菰野、神戸、白子、石薬師、稲生、亀山、津、津西【単】、津東【単】、久居【単】、白山、松阪、相可【単】、宇治山田、伊勢、南伊勢（南勢、度会校舎）、志摩、上野、名張青峰【単】、尾鷲【単】、木本、紀南【単】
	コース制	四日市（国際科学）、四日市南（数理科学）、四日市西（比較文化・歴史、数理情報）、四日市四郷（スポーツ科学）、白子（文化教養）、久居（スポーツ科学）【単】、伊勢（国際科学）、名張青峰（文理探究）【単】、尾鷲（プログレッシブ）【単】
専門学科	農業	四日市農芸、久居農林、相可、明野、伊賀白鳳（生物資源・フードシステム）【単】
	工業	桑名工業、四日市工業、四日市中央工業、津工業、松阪工業、伊勢工業、伊賀白鳳（機械・電子機械・建築デザイン）【単】、尾鷲（システム工学）【単】
	商業	四日市商業、津商業、白山（情報コミュニケーション）、宇治山田商業、松阪商業【単】、伊賀白鳳（経営）【単】、尾鷲（情報ビジネス）【単】
	水産	水産（海洋・機関、水産資源）
	家庭	四日市農芸（生活文化）、白子（生活創造）、亀山（総合生活）、久居農林（生活デザイン）、相可（食物調理）、明野（生活教養）
	看護	桑名（衛生看護）
	情報	亀山（システムメディア）
		朝明（ふくし）、明野（福祉）、伊賀白鳳（ヒューマンサービス）【単】
		桑名（理数）、川越（国際文理）、神戸（理数）、稲生（体育）、飯野（英語コミュニケーション・応用デザイン）、津西（国際科学）【単】、松阪（理数）、松阪商業（国際教養）【単】、上野（理数）
総合学科		いなべ総合学園、飯南、昴学園、鳥羽、あけぼの学園、名張、木本　【すべて単位制】

定時制課程

普通科	桑名、北星【単】、飯野【単】松阪工業【単】、伊勢まなび（昼間部）【単】、上野、名張【単】、尾鷲【単】、木本【単】
専門学科	北星（情報ビジネス）【単】、四日市工業【単】、伊勢まなび（夜間部：ものづくり工学）【単】
総合学科	みえ夢学園【単】

通信制課程

普通科	北星【単】松阪【単】

資料 5-5

【第２回教育改革推進会議（7/20）資料】

令和３年度第２回教育改革推進会議概要

日時　令和３年７月 20 日(火)　14 時 00 分～16 時 00 分

【これからの県立高等学校活性化の基本的な考え方について】

○　「(１)新しい時代を生き抜いていく力の育成」と「（２)新たな時代に対応するために必要な力を育むための学びの推進」について、(１)には今後の高校教育で育んでいきたい力といった大きな方向性について書かれ、(２)では具体的にどのように進めていくのかが書かれている。(１)と(２)いずれも目指しているのは新しい時代を生きていく力を育成することである点をふまえて、両項目の関係性が分かりやすくなるよう記述を整理すべきではないか。

○　学校教育は「生徒一人ひとりの個別最適な学び」と「生徒同士の協働的な学び」がセットになってはじめて成立するものである。この点、「(２)　新たな時代に対応するために必要な力を育むための学びの推進」のア)の記述「全ての生徒における」について、「生徒同士の、生徒間の」といったニュアンスが弱いことから表現を工夫すべきではないか。

○　「(５)特色・魅力ある教育の実現に向けた学校経営と教職員の資質向上」について、学校では校長や教頭といった少数の管理職が大勢の教職員をマネジメントしているが、組織としての指揮命令をより徹底するためには、学校内での役割分担をしっかり行っていくという視点が必要ではないか。

○　「基本的な考え方」は総花的に記述されているが、これをふまえて具体的な取組を検討する段階にあっては、次期計画の計画期間において重点的あるいは優先的に取り組むことは何かといった整理が必要である。

【県立高校の規模と配置について】

○　これまで学校別活性化協議会を中心に高校活性化に向けた議論を積み重ねてきた中で、それぞれの協議会では、子どもたちの学びを維持していくには現状のままでは困難だといった意見が徐々に増えてきている。紀南高校協議会でも意見が出されているが、そろそろ県教委から今後の案を出して、それをもとに学校・地域で議論を進めていくフェーズに入ってきたのではないか。

○　高校統合も含めた今後の高校のあり方を検討するにあたっては、一校一校を個別に見て判断するのではなく、地域の中での各校の関係性等をふまえた地域一体での議論が必要ではないか。

○　子どもたちの学びにとって一定の学校規模は必要であるが、望ましい学校規模であるかどうかについては、「１学年３学級から８学級」よりもう少し大きな規模が良いのではないかといった検討も必要ではないか。

○　その高校が地域になくてはならないものかどうかを考えるにあたっては、どれだけの卒業生が高校卒業後に地域に残り、あるいは大学卒業後に地域に戻って地域を支える人材となっているか、また、その高校が地元の子どもたちから選ばれ、地元からの入学率が一定あるかという２つの視点で見ていくことが必要だと考える。

○　昨年度実施した高校生を対象としたアンケートの結果を見ても、多様な価値観の中でより良い人間関係を築けているということが子どもたちが高校生活に満足感を得る大きな要素となっていることがわかる。こうしたことをふまえると、子どもたちが一定の人数の中で学んでいけるようにしてあげたいと感じる。

○　小規模校は生徒一人ひとりに手厚くできる一方で、教職員が少ないために校務分担の負担が大きく研修機会も確保しにくい、部活動も制限されてくるといった面がある。高校だけでなく小中学校においても、集団の中で人間性や社会性を育むといった学校の機能を果たしにくい状況が出てきている中で、子どもたちの真の学びを考えた場合、学校に一定の規模は必要であると考える。ただし、地域における今後の高校のあり方を検討するにあたっては、山間部等通学困難な地域の子どもたちのこともしっかり考えていく必要がある。

○　子どもたちにとって、人との関りの中で切磋琢磨して力を付けていくということはとても大事なことであるので、高校には一定以上の規模が必要である。
　小規模校におけるきめ細かい指導等に魅力を感じて入学してくる子どもたちが一定数いると考えられる中、小規模校を他校と統合して一定規模の新たな学校を作る場合においては、こうした小規模校の学びを求める子どもたちのニーズに応える必要がある。こうした視点も考慮しながら、統合の判断にあたっては十分な検討を重ね、慎重に行われるべきである。

○　新しい時代を生きていくための力の育成やそのための学びの推進のためには、望ましい学校規模とあわせて学級規模についても検討していくことが必要ではないか。

○　10 年、20 年先を考えると都市部の高校の小規模化についても考えていく必要があることから、都市部の高校も含め三重県全体でこれからの高校がどうあるべきか、中学校卒業者数の減少にどのように対応していくのか今後も継続的に議論していく必要がある。

○　小学生や中学生の保護者の中からは、子どもたちにはドッジボールやソフトボールをさせたやりたい、そうしたことができるように学校には一定の規模が必要であると思う一方で、学校の統合は地元の方々からはなかなか受け入れならないものだとの声も聞く。地域に学校は必要であるが、しかし、そのために子どもたちの学びが阻害されてしまうことはあってはならないことだと思っている。

○　本日の議論をふまえると、子どもたちの学びにとっては一定の学校規模が必要であり、そのためには、高校統合もやむを得ないと感じる。こうした方向での検討が地域協議会等の場で今後必要であるが、その際には、県教委から当該地域の高校のあり方についてのたたき台を示すなど、地域の方々が議論しやすくなるようなやり方が求められるのではないか。

　また、県教委においては、地元中学校からの進学希望や定員充足の状況、通学困難な地域への配慮など統合を検討していくための考え方を考えていく必要があるのではないか。

○　それぞれの小規模校にあってはこれまで活性化に一生懸命に取り組んできていただいた。しかしながら、入学状況を見るとほとんどの高校が地元の子どもたちから選んでもらえる状況にはなっていないのが現状である。がんばって取り組んできたのになぜこのような結果となっているのか。地域に学校を残したいと考えている地元の方々と、子どもが志望校の選択に迫られている親・保護者との間の考え方の相違、世代間の意見の相違があるのではないか。こうしたことについても、当該地域の高校のあり方について今後検討を進めていくにあたって考慮すべきことである。

○　高校統合の方向は致し方ないと思うが、保護者は例えば子どもの送迎など様々な負担も見込んでいるので、統合に際しては丁寧に保護者へ説明されるよう進めてほしい。同様に、毎年度の県立高校募集定数についても、子どもたちの進路選択に大きな影響を及ぼすものであることから丁寧な説明が必要である。

○　三重県の未来のために、一人ひとりの子どもたちに高校での学びを通してこれからの時代に必要な力を育むこと、また、そうした学びができる学校のあるべき姿を考え実現していくことが県立高校活性化の本来の目的であることを忘れずに今後の議論を進めていくことが求められる。

資料６

＜あけぼの学園高校　活性化取組の総括的な検証＞

活性化の取組

伊賀地域の県立高校は、地域の人材育成に貢献する学校、大学等への進学に対応した学校、多様な子どもたちが安心して学び意欲的に活動できる学校、ＩＣＴを活用した学びやグローバルな活動に取り組む学校など、それぞれの特色や魅力を生かしつつ地域と連携しながら、子どもたちのよりよい学びの実現のためにその役割を果たしてきました。

あけぼの学園高校は、美容服飾、製菓調理、健康福祉、情報教養の４つの系列を持つ総合学科で、多様な選択科目から一人ひとりの個性に応じた授業を選択することにより、将来の夢の実現をバックアップしています。また、フィールドワークやインターンシップ、小中学校との交流やイベントへの参加などの地域と連携した取組を積極的に取り入れ、自信と誇りを持ち、地域に貢献できる人材の育成を図っています。

同校は伊賀地域唯一の２学級規模の学校であり、各年次を３クラスに分けてホームルームを構成しています。習熟度別学習や少人数教育を積極的に取り入れ、学ぶ喜びを感じられる授業を展開し、家庭的な雰囲気の中で一人ひとりを大切にする教育を推進しています。

こうした中、あけぼの学園高校は、一人ひとりが“自信と誇り”を持ち、地域に貢献し地域から信頼される学校を目指し、

（１）伊賀地域唯一の小規模校としての特徴を生かし、丁寧で親身な指導を受けることができ、生徒が安心して学べる学校づくりを進める。

（２）総合学科としての特徴を生かし、生徒一人ひとりの個性やニーズ、自主性を大切にした特色ある実践的な教育を展開し、“自信と誇り”を持ち、地域で活躍できる人材を育てる。

（３）校内外における取組を情報発信することや地域との交流・連携を行うことで、地域から信頼される学校づくりを推進する。

といった方向性のもと、活性化に取り組んできました。

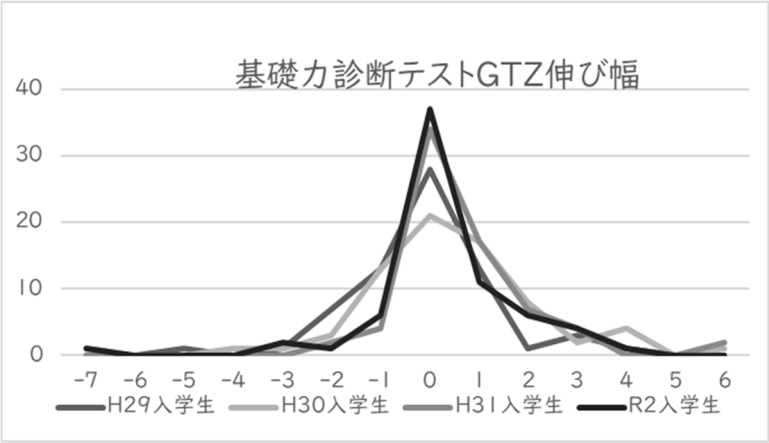
（１）伊賀地域唯一の小規模校としての特徴を生かし、丁寧で親身な指導を受けることができ、生徒が安心して学べる学校づくりを進める。

○一人ひとりを大切にした丁寧で親身な学習指導に取り組んでいます。国・英は１学年を４クラス編成で、数は習熟度別の３クラス編成で授業を行っています。一人ひとりに目が行き届くことで、学習効果は上がっています。令和３年度入学生からは、１人１台 iPad（個人所有）を導入し、１年次の国数英において個別最適化学習に取り組むこととしています。

基礎力診断テストの学習到達ゾーンのランクアップ　（目標３０％）

入学年度	H28	H29	H30	Ｒ１	Ｒ２
３年間の伸び率	-	0.00	0.56	0.67	0.26
ランクアップ生徒	-	１９人	３４人	３０人	２２人
上記生徒の割合	-	27.5%	45.9%	42.9%	31.9%

※伸び率：入学年度６月と卒業年度６月との比較。変化なしを０として、伸び幅×人数を全体数で割ったもの。Ｒ２は２年次６月との比較。



◆ＧＴＺとは
Ｓ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄの
１～３、(＋)(－)で評価

（Ｓ１＋）～（Ｄ３－）

○在校する全ての生徒が自己肯定感を高め、希望する進路が実現できるよう、さまざまな資格取得を推奨しています。１年次には、全員が漢字検定、ビジネス文書検定を受験するとともに、２，３年次では、各系列に応じた専門的な資格取得に取り組んでいます。

資格取得の状況　　各検定とも上段左が合格者数、右がのべ受験者数　下段が合格率

年度	H28	H29	H30	R１	R２
漢字検定	－	－	－	22/75 29.3%	23/65 35.3%
ビジネス文書検定	158/204 77.5%	129/240 53.8%	113/232 48.7%	91/224 40.6%	118/250 47.2%
情報処理検定	8/22 36.4%	18/40 45.0%	12/42 28.9%	12/29 41.3%	18/46 39.1%
全商簿記検定	1/1 100%	1/5 20.0%	2/5 40.0%	3/7 42.9%	7/9 77.8%
食物調理検定	47/70 67.1%	42/48 87.5%	25/31 80.6%	37/50 74.0%	30/44 68.2%
被服製作検定	17/18 94.4%	32/33 97.0%	11/15 73.3%	16/23 70.0%	13/18 72.2%
＊美容師国家試験合格	－	－	2/14 14.2%	3/17 17.6%	5/16 31.3%
介護職員初任者研修修了者	4	3	4	3	4

＊　美容師国家試験受験資格は、別途専門学校通信課程への通学・卒業が必要。
H28 から通信課程への通学を導入。本校生徒としての国家試験受験は H30 から。

○外国にルーツを持つ生徒の割合は、全体の 10～15%となり、一人ひとりの学びを保障するため、１年次は全員で漢字検定に取り組むなど日本語指導に力を入れています。令和２年度からは、１年次の国語の授業で、日本語に不安を持つ生徒に対する日本語指導アドバイザーによる個別指導を行うとともに、全年次対象の日本語課外授業を実施しています。令和３年度から、新しく選択科目として「日本のことばと文化」を開設し、日本語教師の資格を持つ社会人講師による日本語の定着に向けた授業を開設するなど、さらなる指導の充実を図ります。

外国にルーツを持つ生徒の数

入学年度	H29	H30	H31	R２	R３
１年次	10 人/80	８人/80	10 人/79	10 人/79	12 人/80

日本語能力試験合格者数（令和２年度から）
令和２年度　Ｎ１：１名、Ｎ３：１名　合格

○１学年８０名を３つのホームルームに展開しており、一人ひとりに寄り添い、目が行き届く体制ができます。また、全教職員による登校指導、昼休みの校内巡視、毎週１回の保健委員会での情報共有などにより、生徒の変化や状況の把握、速やかな対応に努めています。状況に応じて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、発達障がい支援員などの専門家よる相談や支援、児童相談所などの外部機関との連携を行い、生徒がより安心して学校生活を送ることができる環境作りに取り組んでいます。

学校生活に関する生徒アンケート

・学校は一人ひとりを大切にしたていねいな指導を行っているか。

	H28	H29	H30	R１	R２
概ね行っている	74.1%	74.4%	78.0%	79.9%	82.3%

・学校は悩みや意見を積極的に聞いているか。

	H28	H29	H30	R１	R２
概ね聞いている	65.3%	68.7%	71.8%	72.8%	71.9%

いじめの認知件数

	H28	H29	H30	R１	R２
件数	1	2	1	4	6

認知件数の増加については、アンケート回数を増やすなどの丁寧な指導体制が整ってきたためと考えています。認知後については、いじめ防止委員会を開催し、対応にあたっています。

（２）総合学科としての特徴を生かし、生徒一人ひとりの個性やニーズ、自主性を大切にした特色ある実践的な教育を展開し、“自信と誇り”を持ち、地域で活躍できる人材を育てる。

○自己の生き方を主体的に考え、自己肯定感を高め、社会に貢献できる人材の育成と希望進路の実現を目指すため、キャリアガイダンス、地域学習、インターンシップやフィールドワークを充実させています。

※H28 年度からＲ元年度は、１年次に全員がインターンシップに参加した。
Ｒ２年度からは、インターンシップは自己の進路を強く意識した活動とするため、２年次で実施することとし、１年次では、地域の産業や企業を知り、地域で働く魅力ある大人との出会い等と通して、働くことや生きることの意義を考える活動として、フィールドワークを実施することとした。

地域についての意識アンケート結果より（対象：１年次）

年度	H28	H29	H30	R１	R２
①	－	－	－	88%	79%
②	－	－	－	72%	89%

①「地元企業や産業への理解が高くなった」
②「地域への関心が高くなった」

○総合学科としての特徴を生かし、特色ある実践的な教育を展開するため、多様な選択科目を設置するとともに、社会人講師の任用や地域の協力により、専門的、実践的な教育に取り組んでいます。２、３年次の選択科目では、全国でも珍しい美容の科目を始め、陶芸、生涯スポーツ（ゴルフ）、和・洋菓子・パン、茶華道、中国語、写真実習、表現研究、デザイン基礎、日本のことばと文化など生徒の希望に沿った選択科目を設置しています。（令和２年度選択科目 119 講座、社会人講師 13 名）

○美容師を目指す生徒（希望者）は、隣県にある美容専門学校通信課程に３年間在籍し、必要な単位を修得することで、３年次の３月に行われる美容師国家試験の受験資格を得ることができる制度を利用して、早い段階からプロ意識を醸成しています。※費用は別途必要です。

美容専門学校（通信課程）への入学

	H28	H29	H30	R１	R２
入学者数	46	29	24	30	17

※H28 は、開校年のため１～３年次生の合計数

（３）校内外における取組を情報発信することや地域との交流・連携を行うことで、地域から信頼される学校づくりを推進する。

○小学生とのお菓子作り、地元中学校への美容出前授業、保育園での忍にん体操交流などを実施することで、地元の保育園、小学校、中学校との交流を深めるとともに、報道機関へも積極的な情報提供を行っています。

報道資料提供の回数　H28・H29 は不明

年度	H28	H29	H30	R１	R２
回数	－	－	14 回	７回	４回

※令和２年度は４回の資料提供を行い、５件の新聞掲載、１件のテレビ放映、２件のラジオ放送がありました。

○高校生活入門講座を毎年１０月に開催しています。募集定員を超える参加者があり、志願者数の安定につながっていると考えられます。

高校生活入門講座参加者数

年度	H28	H29	H30	R１	R２
中学生	105	151	140	128	149 人
保護者	29	79	63	78	89 人

○通学の利便性を向上させるため、名張方面からの通学専用バスを運行しています。令和２年度には、通学専用バスの乗車券を、三重交通の「通学フリー定期券」に変更しました。他の区間に追加料金を支払うことなく乗車ができるようになったこと、定期券の期間や支払い方法が個々に選択できるようになったことなどにより、バスを利用する方面からの生徒募集の拡大につながるのではと考えられます。

通学専用バス利用者数（３学年計）

年度	H28	H29	H30	R１	R２
全体	74 名	75 名	80 名	65 名	69 名

○部活動については、運動部では、野球部、サッカー部、バドミントン部、バスケット部、陸上部、テニス部が活動しています。団体競技では、他校との合同チームで大会へ参加することが多く、社会性や協力・協働する力を身に付ける場となっています。文化部では、ビューティークリエイト部が令和２年度には９７名の部員数となり、美容技術を競う全国大会で優勝者を輩出するなど、本校の美容の学びと直結した形で成果を収めています。「Akebono　Hair（高校生美容室）」では、地域の方を対象に本校生徒が美容師のアシスタント経験を積むなどの取組を継続して行っています。他にも、漫画研究部と書道部が協力して地域の神社の絵馬をデザインする、軽音楽部が地域の祭りで演奏する、製菓製パン部が地域の食材を使ったパンを考案するなど、地域との連携を図りながら活動しています。

生徒の進路実現

卒業者の進路状況

卒業年度	卒業者総数	進学					就職	その他
		大学	短大	専攻科 高専等	専門学校	その他※		
H28	71	2	1	0	7		59	2
		2.8%	1.4%	0.0%	9.9%	0.0%	83.1%	2.8%
H29	75	1	3	0	7		63	1
		1.3%	4.0%	0.0%	9.3%	0.0%	84.0%	1.3%
H30	75	1	1	0	6		67	0
		1.3%	1.3%	0.0%	8.0%	0.0%	89.3%	0.0%
R1	68	6	2		10		49	1
		8.8%	2.9%	0.0%	14.7%	0.0%	72.1%	1.5%
R2	73	2	0		11	1	51	8
		2.7%	0.0%	0.0%	15.1%	1.4%	69.9%	11.0%

※各種学校等

○４つの系列の特色を生かし、専門性を生かした就職につながるように取り組んでいます。美容、福祉以外では、系列の学習と職業の直結が難しい現状があり、専門性を生かした就職には至っていません。

就職者に占める専門分野への就職の割合

年度	H28	H29	H30	R１	R２
全体	23 名/59 40%	23 名/63 36%	38 名/67 57%	20 名/49 41%	24 名/51 47%
美容服飾	14 名	16 名	31 名	17 名	18 名
健康福祉	７名	５名	１名	１名	４名
製菓調理	１名	１名	１名	１名	１名
情報教養	１名	２名	４名	１名	１名

○地域との連携・交流活動を通して、地域への理解や関心が高まり、地元企業への就職につながるよう取り組みを進めていますが、成果を得るまでには至っていません。美容系列においては、地域との商品開発やインターンシップに取り組む中で、地元美容室への就職がここ数年継続して実現しています。（H26：０名/11、H27：０名/20、H28：１名/14、H29：０名/16、H30：３名/31、H31：２名/17、R２：３名/18）

就職者に占める地元企業就職者の割合

年度	H28	H29	H30	R１	R２
地元就職者	41 名/59 69%	37 名/63 59%	30 名/67 45%	24 名/49 50%	24 名/51 47%

○地域活動で出会う意欲的・魅力的な大人に刺激を受け、自己の生き方を考えるきっかけとなり、自己実現のために専門的に学びたいと志を持って進学する生徒が増加している傾向にあります。

進学者数の推移

年度	H28	H29	H30	R１	R２
全体	10 名	11 名	９名	18 名	14 名

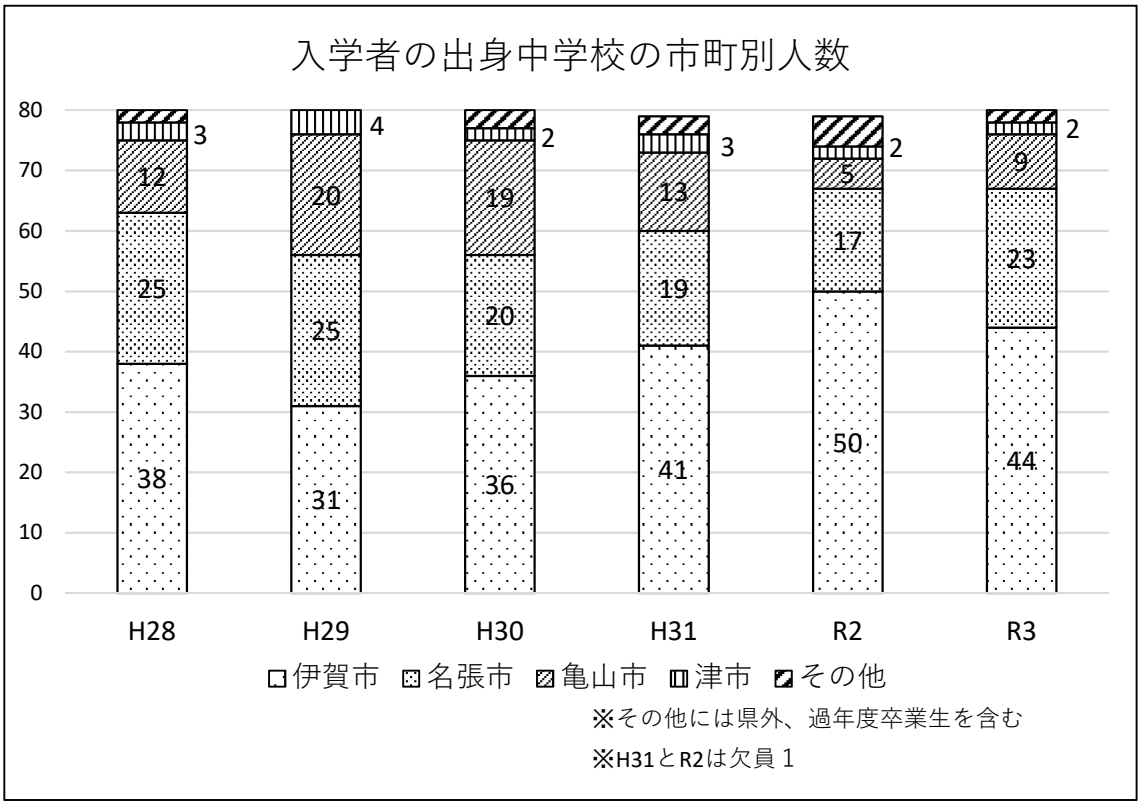
入学者の状況

○入学者選抜については、平成 30 年度以降は、前期選抜、後期選抜とも、志願者が募集定員を上回っています。

入学者選抜の状況

入試年度	入学定員	１２月進路希望調査	前期選抜（定員40）			後期選抜				再募集			入学者数	欠員	備考
			志願者数	志願倍率	内定者数	定員	志願者数	志願倍率	合格者数	定員	志願者数	合格者数			
H28	80	99	99	2.48	45	35	52	1.49	35	―	―	―	80	0	特別選抜１名合格
H29	80	58	58	1.45	44	36	31	0.86	30	6	9	6	80	0	
H30	80	84	80	2.00	47	33	40	1.21	33	―	―	―	80	0	特別選抜３名合格
H31	80	74	73	1.83	45	35	39	1.11	35	―	―	―	79	1	特別選抜１名合格
R2	80	86	86	2.15	44	36	37	1.03	34	2	1	1	79	1	
R3	80	81	81	2.03	44	36	50	1.39	36	―	―	―	80	0	

○入学者の出身中学校の所在地は、伊賀市、名張市、亀山市の３市で９割以上を占めています。直近３年間は、伊賀市からの進学者が５割を超えています。亀山市からはやや減少傾向にあります。



○伊賀地域の公立中学校の卒業者数は減少傾向にありますが、あけぼの学園高校へ入学する生徒の割合はやや増加傾向にあります。

伊賀地域公立中学校卒業者の全日制高校への進学状況

入学年度	卒業者数	あけぼの	上野	伊賀白鳳	名張	名張青峰	5校計	その他県立	私立	県外全日制	全日制以外
H28	1,540	63	314	259	217	287	1,140	146	28	59	167
	100.0%	4.1%	20.4%	16.8%	14.1%	18.6%	74.0%	9.5%	1.8%	3.8%	10.8%
H29	1,450	56	271	259	186	284	1,056	126	39	64	165
	100.0%	3.9%	18.7%	17.9%	12.8%	19.6%	72.8%	8.7%	2.7%	4.4%	11.4%
H30	1,468	56	271	264	175	267	1,033	149	44	69	173
	100.0%	3.8%	18.5%	18.0%	11.9%	18.2%	70.4%	10.1%	3.0%	4.7%	11.8%
H31	1,417	60	270	259	177	258	1,024	152	31	62	148
	100.0%	4.2%	19.1%	18.3%	12.5%	18.2%	72.3%	10.7%	2.2%	4.4%	10.4%
R2	1,377	67	264	252	145	250	978	149	37	61	152
	100.0%	4.9%	19.2%	18.3%	10.5%	18.2%	71.0%	10.8%	2.7%	4.4%	11.0%
R3	1,383	67	260	229	171	222	949	131	49	70	184
	100.0%	4.8%	18.8%	16.6%	12.4%	16.1%	68.6%	9.5%	3.5%	5.1%	13.3%

※全日制以外：定時制、通信制、高専、特別支援学校、就職、その他

伊賀地域公立中学校からあけぼの学園高校への進学者数

＜伊賀市＞

入学年度	卒業者数	入学者数	
H28	838	38	4.5%
H29	761	31	4.1%
H30	748	36	4.8%
H31	743	41	5.5%
R2	735	50	6.8%
R3	724	44	6.1%

＜名張市＞

入学年度	卒業者数	入学者数	
H28	702	25	3.6%
H29	689	25	3.6%
H30	720	20	2.8%
H31	674	19	2.8%
R2	642	17	2.6%
R3	659	23	3.5%

○伊賀地域では、今後、特に北部で生徒減が進むことが見込まれています。

【伊賀地域中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）令和３年５月１日】

		H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中２	R 6.3 現中１	R 7.3 現小６	R 8.3 現小５	R 9.3 現小４	R 10.3 現小３	R 11.3 現小２	R 12.3 現小１
伊賀市	卒業者数	829	829	807	770	787	762	743	685	674	684	652	631	608
	前年度対比		0	-22	-37	17	-25	-19	-58	-11	10	-32	-21	-23
	R3.3対比					17	-8	-27	-85	-96	-86	-118	-139	-162
名張市	卒業者数	720	674	642	659	653	636	642	671	641	648	633	606	584
	前年度対比		-46	-32	17	-6	-17	6	29	-30	7	-15	-27	-22
	R3.3対比					-6	-23	-17	12	-18	-11	-26	-53	-75
小計	卒業者数	1,549	1,503	1,449	1,429	1,440	1,398	1,385	1,356	1,315	1,332	1,285	1,237	1,192
	前年度対比		-46	-54	-20	11	-42	-13	-29	-41	17	-47	-48	-45
	R3.3対比					11	-31	-44	-73	-114	-97	-144	-192	-237
県全体	卒業者数	17,458	16,811	16,489	15,777	16,212	16,046	15,871	15,549	15,405	15,220	14,700	14,343	14,077
	前年度対比		-647	-322	-712	435	-166	-175	-322	-144	-185	-520	-357	-266
	R3.3対比					435	269	94	-228	-372	-557	-1,077	-1,434	-1,700

協議のまとめ

伊賀地域の県立学校は、これまでそれぞれの特色や魅力を生かしつつ地域と連携しながら、子どもたちのよりよい学びの実現のためにその役割を果たしてきました。こうした中、本校では、①伊賀地域唯一の小規模校としての特徴を生かし、丁寧で親身な指導、生徒が安心して学べる学校づくりを進める、②総合学科としての特徴を生かし、生徒一人ひとりの個性やニーズ、自主性を大切にした特色ある実践的な教育を展開し、“自信と誇り”を持ち、地域で活躍できる人材を育てる、③校内外における取組を情報発信することや地域との交流・連携を行うことで、地域から信頼される学校づくりを推進する、という３つの方向性のもと活性化に取り組んできました。

方向性に基づき、様々な取組を行った結果、基礎学力の定着や学びに向かう力の育成、外国にルーツのある生徒への日本語指導など一人ひとりに寄り添った指導の成果が見られています。また、社会人講師の任用や地域の協力による多様な選択科目を設置し、生徒の希望や進路に応じた専門的、実践的な教育を進めるとともに、フィールドワークやインターンシップにおいて、行政や商工会などの協力のもと、地域の産業や文化を学ぶことで、生徒の地域への理解や関心が高まり、“自信と誇り”を持つことにつながっています。また、小中学校との連携では、生徒が地域の子どもたちのキャリア形成におけるロールモデルになっているとの高い評価を得ることができました。

このことから、本校は、一人ひとりに寄り添う丁寧で親身な指導を受けられる学校、地域との連携を密にした取組を積極的に行う学校として、地域の信頼や期待を得るまでになり、それが本校への安定した志願者数につながっています。

しかし一方で、美容、福祉以外では、系列の学習と卒業後の職業との直結は難しく、専門性を生かした就職にはつながっていません。地域との連携を進める中で、地元企業への興味や関心が高まっていますが、地元からの求人の増加や就職決定には至っておらず、専門性を身に付けるだけでなく、コミュニケーション力や行動力・積極性の育成など、地域に貢献できる人材の育成を一層図るよう進めていく必要があります。

今後、県全体での中学校卒業者数の減少がさらに進む中、伊賀北部においても減少による学級減が見込まれます。本校では、地元伊賀市からの志願者が多く、県内地域や県外からの入学生の増加は多くは見込めない状況があります。このような中で、これまで本校が実践して成果をあげてきた、一人ひとりに寄り添う丁寧で親身な指導や特色ある実践的な学び、多様な学びを、生徒減の状況にあっても継続・実現していけるかが課題となります。このことについては、本校だけでなく伊賀地域全体において、これからの高校の学びや各校が果たすべき役割などを踏まえながら協議・検討していく必要があると考えます。

伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況（３カ年比較）

資料７①

区分	進路先	平成３１年３月卒業		令和２年３月卒業		令和３年３月卒業	
		人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
伊賀地域県立高校	上野	270	19.1	264	19.2	260	18.8
	伊賀白鳳	259	18.3	252	18.3	229	16.6
	あけぼの学園	60	4.2	67	4.9	67	4.8
	名張	177	12.5	145	10.5	171	12.4
	名張青峰	258	18.2	250	18.2	222	16.1
	小計	1024	**72.3**	978	**71.0**	949	**68.6**
他地域県立高校	津	52	3.7	48	3.5	40	2.9
	津西	30	2.1	27	2.0	30	2.2
	上記以外　※１	70	4.9	74	5.4	61	4.4
	小計	152	**10.7**	149	**10.8**	131	**9.5**
私立全日制	鈴鹿	1	0.1	1	0.1	4	0.3
	高田	9	0.6	5	0.4	9	0.7
	三重	12	0.8	17	1.2	19	1.4
	桜丘（日生第一）	6	0.4	5	0.4	7	0.5
	上記以外　※２	3	0.2	9	0.7	10	0.7
	小計	31	**2.2**	37	**2.7**	49	**3.5**
県外全日制	国公立	10	0.7	10	0.7	8	0.6
	私立	52	3.7	51	3.7	62	4.5
	小計	62	**4.4**	61	**4.4**	70	**5.1**
県立定時制通信制	上野(定)	18	1.3	5	0.4	10	0.7
	名張(定)	10	0.7	10	0.7	11	0.8
	上記以外の定・通	2	0.1	3	0.2	4	0.3
	小計	30	**2.1**	18	**1.3**	25	**1.8**
県外公立定時制通信制	山辺高校山添分校	5	0.4	7	0.5	16	1.2
	上記以外の定・通	2	0.1	1	0.1	2	0.1
	小計	7	**0.5**	8	**0.6**	18	**1.3**
私立定時制通信制(広域,県外含む)	英心(通)	11	0.8	20	1.5	5	0.4
	徳風(通)	8	0.6	6	0.4	13	0.9
	上記以外　※３	23	1.6	27	2.0	46	3.3
	小計	42	**3.0**	53	**3.8**	64	**4.6**
高等専門学校	鈴鹿高専	4	0.3	6	0.4	10	0.7
	鳥羽商船	2	0.1	2	0.1	0	0.0
	近大高専	40	2.8	34	2.5	32	2.3
	県外高専	2	0.1	4	0.3	2	0.1
	小計	48	**3.4**	46	**3.3**	44	**3.2**
特別支援学校	伊賀つばさ学園	5	0.4	5	0.4	12	0.9
	特別支援聖母の家	1	0.1	0	0.0	0	0.0
	県外特別支援	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	小計	6	**0.4**	5	**0.4**	12	**0.9**
その他	就職	8	0.6	5	0.4	6	0.4
	上記以外　※４	7	0.5	17	1.2	15	1.1
	小計	15	**1.1**	22	**1.6**	21	**1.5**
公立中学校卒業者数		**1,417**	100.0	**1,377**	100.0	**1,383**	100.0

令和３年３月卒業生

※１　桑名１、四日市２、四日市南１、四日市工業１、菰野１、飯野４、白子３、稲生２、亀山５、津商業３、津東４、津工業８、久居３、久居農林１、白山６、松阪４、松阪工業３、松阪商業２、相可２、昴学園４、水産１の計６１人

※２　暁１、海星５、皇學館１、伊勢学園３の計１０人

※３　県内（定・通）２、県外（定・通）４４の計４６人

※４　専修・各種学校・職業訓練校等４、他（進学待機・求職中・無業等）１１の計１５人

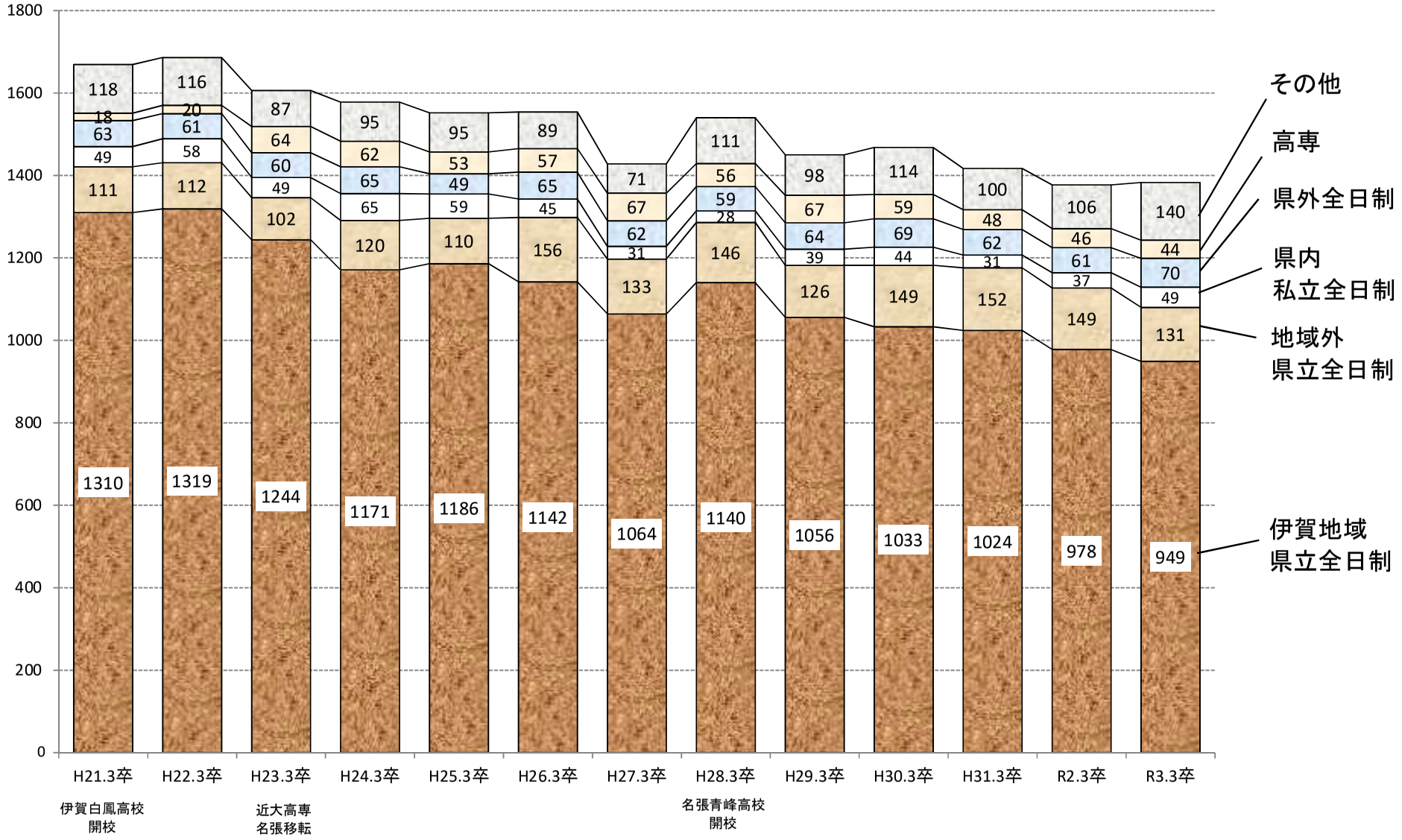
伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況（令和３年３月卒）

資料７②

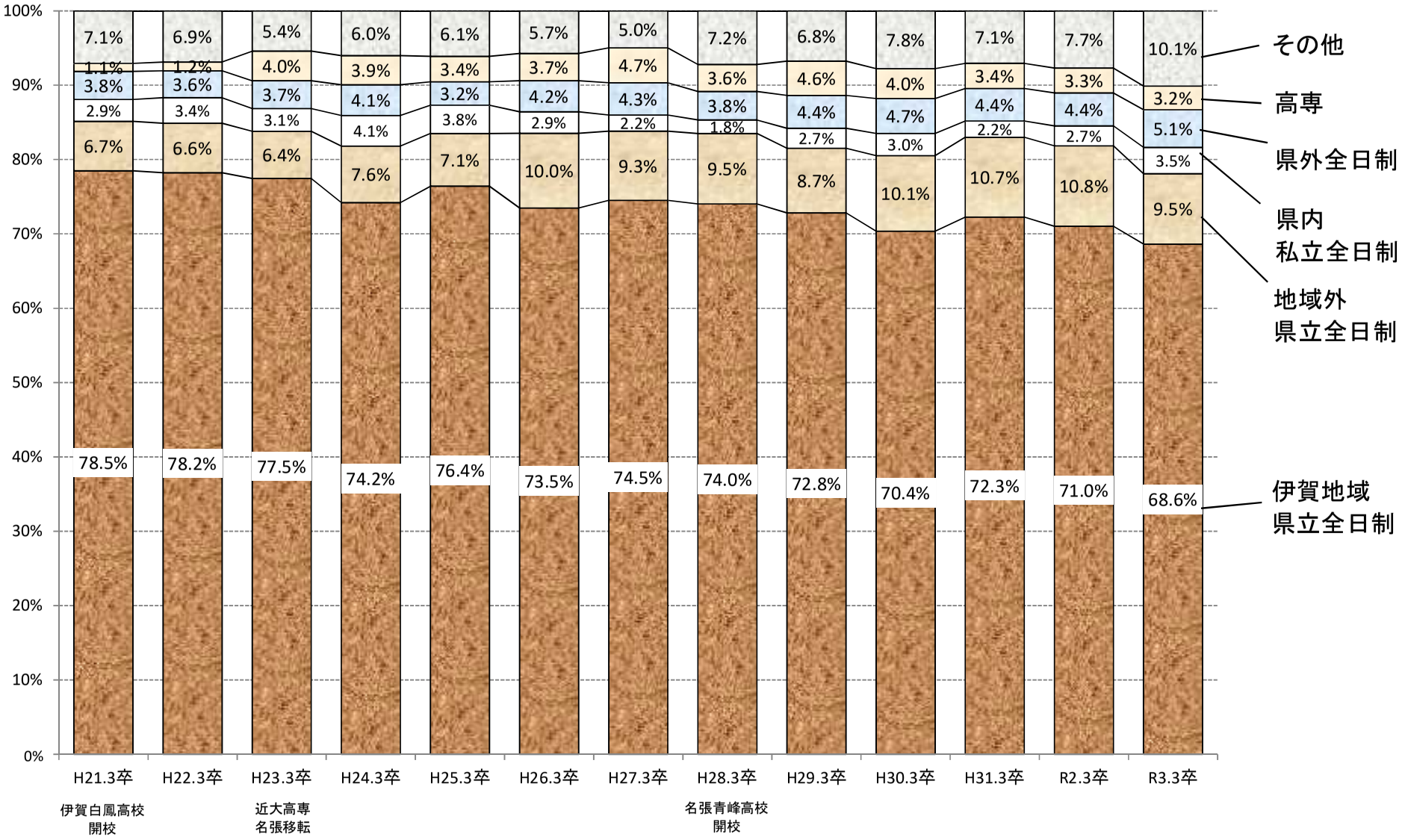
区分	進路先	伊賀市		名張市		伊賀地域合計	
		人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
伊賀地域県立全日制	上野	185	25.6	75	11.4	260	18.8
	伊賀白鳳	199	27.5	30	4.6	229	16.6
	あけぼの学園	44	6.1	23	3.5	67	4.8
	名張	47	6.5	124	18.8	171	12.4
	名張青峰	59	8.1	163	24.7	222	16.1
	小計	534	**73.8**	415	**63.0**	949	**68.6**
他地域県立全日制	津	10	1.4	30	4.6	40	2.9
	津西	5	0.7	25	3.8	30	2.2
	上記以外　※１	33	4.6	28	4.2	61	4.4
	小計	48	**6.6**	83	**12.6**	131	**9.5**
私立全日制	鈴鹿	4	0.6	0	0.0	4	0.3
	高田	8	1.1	1	0.2	9	0.7
	三重	8	1.1	11	1.7	19	1.4
	桜丘（日生第一）	5	0.7	2	0.3	7	0.5
	上記以外　※２	7	1.0	3	0.5	10	0.7
	小計	32	**4.4**	17	**2.6**	49	**3.5**
県外全日制	国公立	2	0.3	6	0.9	8	0.6
	私立	23	3.2	39	5.9	62	4.5
	小計	25	**3.5**	45	**6.8**	70	**5.1**
県立定時制通信制	上野(定)	10	1.4	0	0.0	10	0.7
	名張(定)	2	0.3	9	1.4	11	0.8
	上記以外の定・通	2	0.3	2	0.3	4	0.3
	小計	14	**1.9**	11	**1.7**	25	**1.8**
県外公立定時制通信制	山辺高校山添分校	9	1.2	7	1.1	16	1.2
	上記以外の定・通	1	0.1	1	0.2	2	0.1
	小計	10	**1.4**	8	**1.2**	18	**1.3**
私立定時制通信制(広域,県外含む)	英心(通)	1	0.1	4	0.6	5	0.4
	徳風(通)	10	1.4	3	0.5	13	0.9
	上記以外　※３	12	1.7	34	5.2	46	3.3
	小計	23	**3.2**	41	**6.2**	64	**4.6**
高等専門学校	鈴鹿高専	8	1.1	2	0.3	10	0.7
	鳥羽商船	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	近大高専	9	1.2	23	3.5	32	2.3
	県外高専	1	0.1	1	0.2	2	0.1
	小計	18	**2.5**	26	**3.9**	44	**3.2**
特別支援学校	伊賀つばさ学園	4	0.6	8	1.2	12	0.9
	特別支援聖母の家	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	県外特別支援	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	小計	4	**0.6**	8	**1.2**	12	**0.9**
その他	就職	5	0.7	1	0.2	6	0.4
	上記以外　※４	11	1.5	4	0.6	15	1.1
	小計	16	**2.2**	5	**0.8**	21	**1.5**
公立中学校卒業者数		**724**	100.0	**659**	100.0	**1,383**	100.0

資料7③

伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況の推移【人数】



伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況の推移【割合】



資料８

伊賀地域の県立高等学校（全日制）の令和３年度入学者選抜の状況

高校名	学科･コース名	R3 募集定員	R2.12.17 希望者数	前期選抜等			後期選抜				再募集			合格者 総数	入学者数	欠員
				募集人数	志願者数	合格 内定者数	募集人数	志願者数 （最終）	志願倍率	合格者数	募集定員	志願者数	合格者数			
上野	普通	240	170				240	196	0.82	225	15	6	5	230	230	10
	理数	40	75	20	72	20	20	52	2.60	20				40	40	0
	計	280	245	20	72	20	260	248	0.95	245	15	6	5	270	270	10
あけぼの学園	総合学科	80	81	40 4	81 0	44	36	50	1.39	36				80	80	0
伊賀白鳳	機械	35	37	18	37	20	106	109	1.03	106				240	240	0
	電子機械	35	21	18	21	18										
	建築デザイン	35	53	18	52	20										
	生物資源	35	30	18	31	20										
	ﾌｰﾄﾞｼｽﾃﾑ	35	41	18	42	20										
	経営	30	17	15	18	16										
	ﾋｭｰﾏﾝｻｰﾋﾞｽ	35	35	18	33	20										
	計	240	234	123	234	134	106	109	1.03	106				240	240	0
名張	総合学科	200	188	100	195	107	93	110	1.20	93				200	200	0
名張青峰	普通	200	236	60	230	66	134	135	1.01	134				200	200	0
	文理探究ｺｰｽ	40	52	20	52	22	18	27	1.50	18				40	40	0
	計	240	288	80	282	88	152	162	1.07	152				240	240	0
伊賀地域計		1,040	1,036	367	864	393	647	679		632	15	6	5	1,030	1,030	10

※「R2.12.17希望者数」は、県内の国公私立中学校３年生を対象に実施された進学希望状況調査（R3.1.15公表）による。

※あけぼの学園の上段は前期選抜、下段は特別選抜

資料９

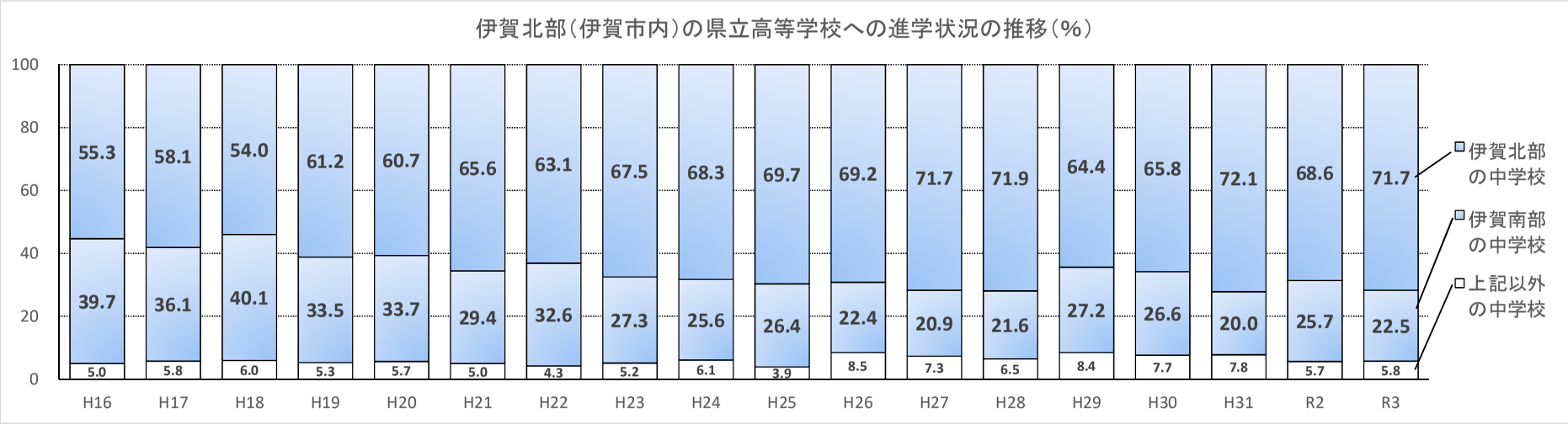
各高等学校の入学者の出身中学校と卒業者の進路状況

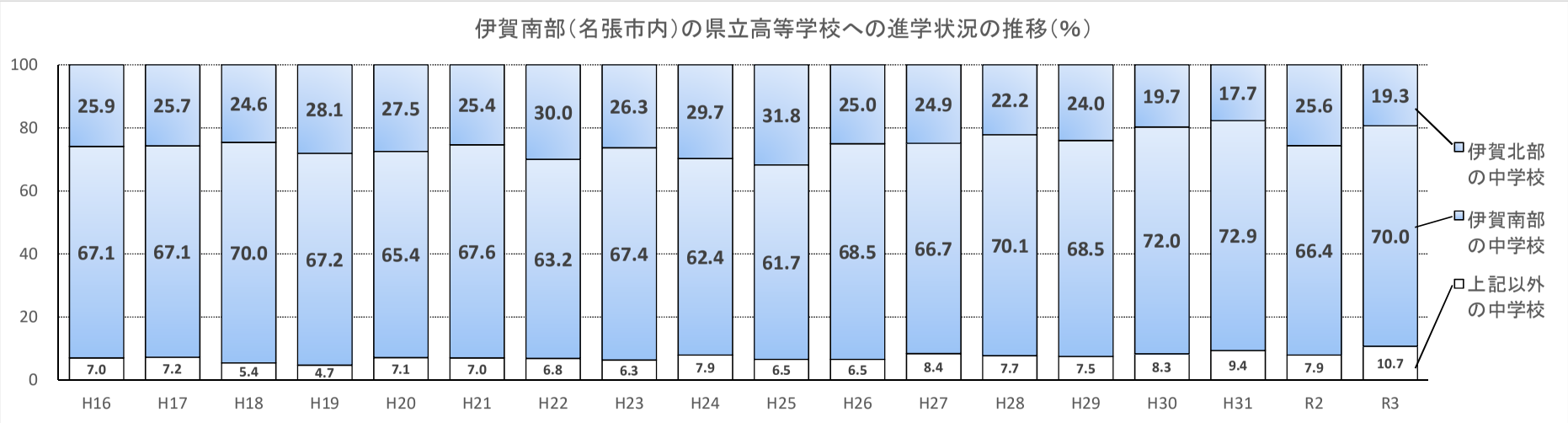
			上野	あけぼの学園	伊賀白鳳	名張	名張青峰
設置学科等（R3募集定員）			普通(240) 理数(40)	総合(80)	工業・農業 商業・福祉 (240)くくり募集	総合(200)	普通(200) 文理探究(40)
R3年度の入学生の出身中学校	伊賀北部の中学校	人	185	41	197	37	48
		%	68.5%	51.3%	82.1%	18.5%	20.0%
	伊賀南部の中学校	人	75	26	32	134	174
		%	27.8%	32.5%	13.3%	67.0%	72.5%
	上記以外の県内中学校	人	6	13	7	15	14
		%	2.2%	16.3%	2.9%	7.5%	5.8%
	県外の中学校（奈良県等）	人	4	0	4	14	4
		%	1.5%	0.0%	1.7%	7.0%	1.7%
	入学者数計	人	270	80	240	200	240
R2年度卒業生の進路状況	4年制大学（大学校含む）	人	233	2	32	36	160
		%	86.9%	2.7%	12.5%	18.7%	58.8%
	短期大学（高専含む）	人	6	0	20	23	18
		%	2.2%	0.0%	7.8%	11.9%	6.6%
	専修・各種学校等	人	9	12	41	69	75
		%	3.4%	16.4%	16.0%	35.8%	27.6%
	就職	人	3	51	155	55	8
		%	1.1%	69.9%	60.5%	28.5%	2.9%
	その他（進学待機を含む）	人	17	8	8	10	11
		%	6.3%	11.0%	3.1%	5.2%	4.0%
	卒業者数計	人	268	73	256	193	272

※　「伊賀北部の中学校」は伊賀市の中学校から青山中学校を除き、「伊賀南部の中学校」は名張市の中学校に青山中学校を加える。

資料１０

伊賀地域の県立高等学校への進学状況の推移【北部・南部別】





※　「伊賀北部の中学校」は伊賀市の中学校から青山中学校を除き、「伊賀南部の中学校」は名張市の中学校に青山中学校を加える。

資料１１

令和３年度の協議について

１　協議の進め方

少子化の急激な進行とともに、予測することが困難であるほど社会情勢が大きく変化する中で、子どもたちを取り巻く教育的課題はより複雑化・多様化しています。さらに昨年来のコロナ禍により、学校のあり方や教育そのものの意義も問われている状況です。そのような中、これからの時代を生きていく高校生にどのような力を育み、本県の県立高校でどのような教育を進めるべきかなど、これからの三重の高校教育のあり方について検討していく必要があります。

こうした本県の県立高校の将来像については、「三重県教育改革推進会議」を中心に議論・整理していくとともに、既存の高校教育の枠にとらわれない幅広で多様な観点・角度から調査し考察を加えるため、昨年度より「県立高等学校みらいのあり方検討委員会」を設置して、検討を重ねてまいりました。今年度は次期「県立高等学校活性化計画」（令和４年度から５年間）の策定に向けて具体的な審議を進めています。

令和３年度の伊賀地域の協議会においては、当協議会の「令和元・２年度の協議のまとめ（令和３年３月）」や、第１回あけぼの学園高校活性化協議会（６月）で行われた活性化の総括的な検証をふまえ、これからの伊賀地域において、子どもたちの学習環境をよりよくするため、望ましい学習内容や高校の規模と配置等について協議していきます。

２　これまでの協議と課題　　※別添「令和元・２年度の協議のまとめ」参照

○　平成１８年９月の当協議会のまとめにおいては、伊賀地域の県立高校は、平成２７～３３年（令和３年）頃には４校程度となることをイメージ化しましたが、その後、地域外の高校への進学者の増加や通学事情の変化など、以前とは異なる状況が生じたため、平成２７年３月の協議のまとめにおいては、「本当に４校になってよいのかをよく考えて議論する必要がある。」とされました。

○　令和元・２年度の協議のまとめにおいては、「当面の間、現在の５校を維持することが望ましい」とされる一方で、今後中学校卒業者数がさらに減少することから、「現在の５校の再編を含めて検討し、その結果を令和７年度頃までに明らかにする必要があり、その際は、それぞれの学校の果たしている役割や学びの選択肢をどう整理し分担していくか」が求められるとされました。

○　また、「多様な学習ニーズにこたえる新しいタイプの学校の設置に関しては、・・・どのようなニーズがあるかを的確にとらえるとともに、・・・昼間定時制課程の併置を含めた定時制課程の在り方や通信制課程の機能を取り入れた学習形態について検討する必要」があるとされました。

○　今年度策定する次期「県立高等学校活性化計画」に向けて、今後の中学校卒業者数の減少予測や伊賀地域の県立高校を取り巻く現状や課題をふまえながら、子どもたちの学習環境をよりよくするため、これからの当地域において望ましい学習内容、規模と配置等について協議する必要があります。

３　協議会の開催予定

（１）第１回協議会（８月２５日）

・伊賀地域の県立高等学校の今後のあり方について①

（２）第２回協議会（１０月～１１月）

・伊賀地域の県立高等学校の今後のあり方について②

（３）第３回協議会（２月）

・伊賀地域の県立高等学校の今後のあり方について③

伊賀地域の中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）

資料１２①

令和3年5月1日　教育政策課調べ

	中学校卒業年月	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中２	R 6.3 現中１	R 7.3 現小６	R 8.3 現小５	R 9.3 現小４	R 10.3 現小３	R 11.3 現小２	R 12.3 現小１
伊賀市	卒業者数	829	829	807	770	787	762	743	685	674	684	652	631	608
	前年度対比		0	−22	−37	17	−25	−19	−58	−11	10	−32	−21	−23
	R3.3対比					17	−8	−27	−85	−96	−86	−118	−139	−162
	①公立小中在籍者数	(748)	(743)	(735)	(724)	738	717	713	701	689	703	670	648	622
	②私立中在籍者数	(81)	(86)	(72)	(46)	45	26	18						
名張市	卒業者数	720	674	642	659	653	636	642	671	641	648	633	606	584
	前年度対比		−46	−32	17	−6	−17	6	29	−30	7	−15	−27	−22
	R3.3対比					−6	−23	−17	12	−18	−11	−26	−53	−75
	③公立小中在籍者数					651	637	642	704	668	678	668	636	612
伊賀地域計	卒業者数	1,549	1,503	1,449	1,429	1,440	1,398	1,385	1,356	1,315	1,332	1,285	1,237	1,192
	前年度対比		−46	−54	−20	11	−42	−13	−29	−41	17	−47	−48	−45
	R3.3対比					11	−31	−44	−73	−114	−97	−144	−192	−237
	①②③小中在籍者数					1,434	1,380	1,373	1,405	1,357	1,381	1,338	1,284	1,234

伊賀地域県立高校の１学年学級数	29	28	27	27	27								
（　）内は入学定員の計	(1,160)	(1,120)	(1,080)	(1,040)	(1,040)								

（参考）

		H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中２	R 6.3 現中１	R 7.3 現小６	R 8.3 現小５	R 9.3 現小４	R 10.3 現小３	R 11.3 現小２	R 12.3 現小１
県内合計	卒業者数	17,458	16,811	16,489	15,777	16,212	16,046	15,871	15,549	15,405	15,220	14,700	14,343	14,077
	前年度対比		−647	−322	−712	435	−166	−175	−322	−144	−185	−520	−357	−266
	R3.3対比					435	269	94	−228	−372	−557	−1,077	−1,434	−1,700
	小中在籍者数					16,206	16,008	15,858	15,709	15,562	15,380	14,862	14,509	14,198

伊賀地域の中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）【北部・南部別】

資料１２②

令和3年5月1日　教育政策課調べ

	中学校卒業年月	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中２	R 6.3 現中１	R 7.3 現小６	R 8.3 現小５	R 9.3 現小４	R 10.3 現小３	R 11.3 現小２	R 12.3 現小１
伊賀北部	卒業者数	749	761	747	708	724	702	689	605	612	619	590	573	562
	前年度対比		12	-14	-39	16	-22	-13	-84	7	7	-29	-17	-11
	R3.3対比					16	-6	-19	-103	-96	-89	-118	-135	-146
	①公立小中在籍者数	(668)	(675)	(675)	(662)	675	657	659	618	626	637	607	589	574
	②私立中在籍者数	(81)	(86)	(72)	(46)	45	26	18						
伊賀南部	卒業者数	800	742	702	721	716	696	696	751	703	712	695	664	629
	前年度対比		-58	-40	19	-5	-20	0	55	-48	9	-17	-31	-35
	R3.3対比					-5	-25	-25	30	-18	-9	-26	-57	-92
	③公立小中在籍者数					714	697	696	787	731	744	731	695	660
伊賀地域計	卒業者数	1,549	1,503	1,449	1,429	1,440	1,398	1,385	1,356	1,315	1,331	1,285	1,237	1,191
	前年度対比		-46	-54	-20	11	-42	-13	-29	-41	16	-46	-48	-46
	R3.3対比					11	-31	-44	-73	-114	-98	-144	-192	-238
	①②③小中在籍者数					1,434	1,380	1,373	1,405	1,357	1,381	1,338	1,284	1,234

伊賀地域県立高校の１学年学級数	29	28	27	27	27								
（　）内は入学定員の計	(1,160)	(1,120)	(1,080)	(1,040)	(1,040)								

※　伊賀北部＝伊賀市から旧青山町を除く。
※　伊賀南部＝名張市に旧青山町を加える。

（参考）

		H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中２	R 6.3 現中１	R 7.3 現小６	R 8.3 現小５	R 9.3 現小４	R 10.3 現小３	R 11.3 現小２	R 12.3 現小１
県内合計	卒業者数	17,458	16,811	16,489	15,777	16,212	16,046	15,871	15,549	15,405	15,220	14,700	14,343	14,077
	前年度対比		-647	-322	-712	435	-166	-175	-322	-144	-185	-520	-357	-266
	R3.3対比					435	269	94	-228	-372	-557	-1,077	-1,434	-1,700
	小中学校在籍者数					16,206	16,008	15,858	15,709	15,562	15,380	14,862	14,509	14,198

資料１３

伊賀地域の県立高等学校（全日制）の令和4年度入学定員

上野（普通・理数科）

普通（6）	7学級（280人）
理数（1）	

伊賀白鳳（専門学科）

機械	機械工学	7学級（240人） 7学科 13コース
電子機械	ロボット 電気工学	
建築デザイン	建築・インテリアデザイン	
生物資源	バイオサイエンス 生産ビジネス	
フードシステム	フードサイエンス パティシェ	
経営	ビジネス マネジメント	
ヒューマンサービス	介護福祉 生活福祉	

あけぼの学園（総合学科）

総合	製菓調理 美容服飾 情報教養 健康福祉	2学級（80人） 4系列

名張青峰（普通科）

普通（5）	6学級（240人）
文理探究コース（1）	

名張（総合学科）

総合	文理アドバンス 総合ビジネス 健康スポーツ 表現デザイン	5学級（200人） 4系列

R4年度
1学年
計27学級
（1,040人）

令和8年度
1学年　計24～25学級（920～960人）程度（見込）